

の集まる辻々に立つて大獅子吼をやつたものだ。寺の門前に立つて大聲で盛に佛教の墮落、賣僧の攻撃をやつたのだから、人集りがしてな、皆熱心に聞いたよ。太い／＼ステッキをついて都大路を肩で風を切つて横行闊歩したものだ。若氣の至りの思想の偏狹は恥かしいが、しかし元氣はあつた。今の若い人達は意氣地がないのう。

筆者、去月長崎市の國幣中社諏訪神社に賽し、宮司阿知和安彦氏に面會す。氏は實に當時の皇典講究所主事たりし人なり。「出口聖師ミ云ふのは王仁さんの事ださうですね」ミ口を切り「車に大根や菜葉を積んで校門の側に置いて草鞋穿きで登校したものです。熱心に勉強し又非常に辯論が好きで、自分で雄辯會なごを起し、口角泡を飛ばして辯じたたつたものです。温情のある人で閑があるミ私の小供を負つて守をして呉れた。時々大根や薩摩薯なごをソツミ庭の隅において歸つた。あの人が今の出口王仁三郎聖師其人なのですかねえ、余りの出世振りで、私にはさうも同じ人ミは信ぜられない位であるが、雑誌の口繪を小供に見せて「こ

の人を知つて居るか」ミ聞きますミ、皆が口を揃へて、「王仁さんだ、王仁さんだ」ミ申たミ感慨無量の態でこのお話に裏書をして居られました。

心配は毒

人間にミつて心配程毒なものはない。心配は壽命を縮める。心配事が出て來ても總てを神様に奉納して心配せぬやうにする、これが長壽の秘訣だ。

小供になつて寝る

私は夜寝る時、小供になつて寝る、小供になれば悪魔はよう襲はぬものである。

筆者申す。聖師様お寝みの時は全く小供にかへられ「もうねんねする、ねんねんいうて」

云うてお床へお入りになります。當時七才位の尙江様が紅葉のやうな手で、布團の上から叩きながら「ねんねんようねんねんよう」云うて居られたのを、度々お見受けいたしました。近頃は「ねたらう、靈界物語を読んで」云う仰有つて、それを聞きつゝ、普通數蒲團の三倍の廣さのある大蒲團の上を小供のやうに、ごろ／＼轉がりながら、お寝みになる場合が多う御座います。お言葉も一ちゆ二ちゆ三ちゆな小供の言葉を使はれますので、かゝる時大きな赤ちやんのやうだ云々申してをります。

年をほかした

私は今年から年を三十放かして二十九になつた。飯はなんぼでも食へるし、今迄にない位丈夫になつた、はち切れる程元氣旺盛だ、大いに活躍しよう。

大本と言ふ文字

大本云ふ文字は、縦にも横にも分つ事が出来ぬ完全な字で、これには大に理由のあることである。天理、金光、黒住、耶蘇、佛敎等皆經にか緯にか判れるやうになつてゐる。天理の天は一に大に別れ、理は王に里に別れ、黒住は里に火に人主に別れて居る。耶蘇も佛も同じである。

食用動物

キの字のつく四足類は、食用とすることを許されて居るのである。例へば、狸、狐、兎の如きもので又たまがへししてキになるものも許されるのである。かも鹿の如きがそれであつて、これ等は神界の方で木即ち植物に宣り直して居て下さるのである。鳥類でも鴨、雉の如き皆キ

にかへるので、鶏をカシワミ呼びならはしたのも櫛の意味で木云ふ事になる。牛馬の肉は食用としてはいけない。

(175)

吳の海

靈界物語中に示されたる吳の海云ふのは、吳の附近である。廣島は往古一つの嶋であつて今の廣島から九州の別府の邊迄陸続きになつて居たのである。その以東を瀬戸の海云ひ、以西を吳の湖云ふたのである。

アテナの神

ギリシヤ神話中に現はれたるアテナの神云ふのは天照大神様の事で、アは(天)テは(

照)ナは十字即ち神である。アポロの神云ふのは、天津日の神云ふ事で、アは(天)ホは(日)ロは(御子)の意である。

黄教紅教

支那人は黄色と赤色を特別に好むやうであるが、それは矢張り宗教關係から來て居るので支那のラマ教は黄教、紅教の宗派があつて、今日は黄教が盛んである。かうした關係から、黄赤の色が愛好せらるゝのである。總て赤を好むのは動物の天性である、小供や、牛がそれを證して居る。牛なごは赤い布で裝飾をしてやるに非常に喜んで元氣がよくなる。

老年と身躰

(174)

他人によい感じを起こさすやうに努める事は人間の禮儀である。若い時は繕はないでも綺麗なものであるが、年取るに従つてだん／＼汚くなつて行くのであるから、若い人よりも年こつた人の方が身だしなみの必要があるのである。西洋人が年こる程若作りになるのも、一理ある事で、兎に角人は年こるに従つて手入れをよくし、女なごも薄化粧でもして、老衰から來る悪感を可成人に與へん様にするがよろしい。

(180)

自然に描ける繪

繪を描くに當つてさうも甘くゆかないでゆき詰つて仕舞うは「誰か出て來い」を怒鳴るさうするにすら／＼描けて行く、誰か出て來て描くのであらう。私の繪は私が描くのに相違ないけれど、私の工夫以上に自然によくなつて行く、繪が繪を描くのである。元來私は繪を上

手に書こうなんと思つては居ない、上手か下手かそんな事は知らない、惟神のまに／＼筆を下すのである。

睡眠と食事

人間は三時間ねむれば澤山である。それ以上睡れば、寢疲れでかへつて睡眠病を惹起する。今の人間は大底睡眠病にかゝつて居る。食事も二食がよい。朝六時なれば晩も六時、七時なれば七時、いふやうに十二時間おきにこるのがよい、三食になつたのは關ヶ原の戦ひ以來の事である。勞働者が三度四度食べるのは勞働が喰ふのである。一人人間は睡眠の時間、食事の量等一生涯のものはちやんご定められて居るのである。だから私は年こつてから眠られるやうに、今の中に少なくなねむつておく。

(181)

繪について

南畫は詩を主とし、詩で現はせないところを繪で補はうと試みて居るのだから、繪としてはあつさりとしたものである。私の流儀は自ら稱して神代派といつて居るが、神素盞鳴尊を心に念する時、あつした繪がかかるのである。繪畫展覽會を見た人が、「一々描き方がかはつて居て、一人の人がかいたとは思へない」と評したと聞くが、まことに其通りで、私の想念が應舉にある時其畫風が應舉に現はれ、月樵を思ふ時、其筆法が月樵流に出て來るので、私の想念次第で千種萬態の畫風が生ずるのであるから、一人の人が描いたと思へぬと言ふ評は、私の繪を知るもの、言である。一流一派に拘泥する必要は無いと思ふ。私は近頃山水を漫畫の調和を思ひ立ち、筆を執つて見たが、案外甘くいつて、一寸面白いものが出來た。これは恐らくレコードであらうと思ふ。抑々藝術の祖神は、素戔嗚大神様であるから心中この大神を念ずる

時、繪畫と言はず、陶器と言はず、詩歌と言はず凡ゆるものに獨創が湧くのである。

龍は耳が聞えぬ

龍の耳を書いて聾と讀むが、龍は耳が聞こえぬものである。龍は神界に屬して居るから人間の言葉は通ぜぬ、神様の言葉でなくては聞えぬのである。だから普通の人に風雨を叱咤する力はない、神界に通ずる言葉の持主のみが龍に命令し、天然現象を自由にし得る權能をもつて居るのである。

人神

顔面がビク／＼と動く事がある。あれは人神と稱する靈の作用であつて、普通の場合「人神

そこ退け灸据ゑる」三度唱へるこそれで退散するが、善い神様が其人の体内に納まつて御用をしようと思つて來られる場合は中々治まらず、二三週間位もビクビクやつて居るが、それがすつかり静まつて來るこ、其靈の活動が開始せられて來る。開祖様も額に來られた、唇に來られたこよく申されたが、私にもそんな事がよくある。

(164)

お給仕について

獨身者なごが、留守中神様のお給仕について困るこ言ふのか、さうであらう。神様は心を受け玉ふのであるから、こちらの誠心さへ届けばそれでよい。だから出る前に澤山お米さんをお供へして、留守中のお給仕にあてる意味を奏上しておゆるしを願つておいたらそれでよろしい

五百津御統丸の珠

五百津御統丸の珠こ言ふのは、水晶、珊瑚、紅玉、瑠璃、瑪瑙、硨磲、翡翠、眞珠、黄玉、菅玉、曲玉なごを集めて造りたるものにて、ミロク出現の時裝飾として、首にまかせ、耳づらに織かせ、腰にまかせたまふ連珠の玉である。黄金の玉こ靈界物語にあるは金の玉にあらずして黄色の玉の黄金色に光りたるものを言ふのである。又皆の神々が玉の御用をせんこ活動する所があるが、このミロクの御用に奉る玉の事であつて、神政成就の御用の玉である。この玉が寄つて來ねばミロク出現の活舞臺は來ない。玉が集まれば其準備が出來た事になる。玉は心を清淨にし、悪魔を防ぐものである。

素尊御陵

岡山縣和氣郡熊山の山頂にある戒壇は、神素煮鳴大神様の御陵である。古昔出雲の國こ稱せ

(165)

られたる地點は、近江の琵琶湖以西の總稱であつて、素盞鳴大神様のうしはぎ給うた土地である。湖の以東は天照大神様の御領分であつた。この故に誓約は其中央にある天の眞奈井即ち琵琶湖で行はれたのである。出雲の國と言ふのは、いづくもの國の意にて、決して現今の島根縣に限られた譯ではないのである。素盞鳴大神様は八頭八尾の大蛇を御退治なされて後、櫛田姫と壽賀の宮に住まれた。尊百年の後出雲の國の中、最上清淨の地を選び、御尊骸を納め奉つた。これ備前國和氣の熊山である。大蛇を断られた十握の劔も同所に納まつて居るのである。彼の日本書紀にある「素盞鳴尊の蛇を断りたまへる劔は今吉備の神部の許にあり、云々」があるが熊山の事である。この戒壇と稱ふる石壇は、考古學者も何れも鑑定がつかぬと言つて居るさうであるが、其筈である。

因に熊山の麓なる伊部町は伊部焼の産地であるが、大蛇退治に使用されたる酒甕は即ち此地で焼かれたものである。伊部は忌部の義であり、又齋部の意である。

筆者申す、昭和五年五月二十日舊曆四月二十二日聖師様は熊山に御登山になり御陵に奠せられましたので、筆者も隨行致しました、當時の記事を御参考の爲め掲載さして頂きます。

熊山にお伴して

加藤明子

「私もいづれ行く」この言葉が事實になつて、昭和五年五月十七日の午後、私は聖師様隨員北村隆光氏より左の招電を受け取りました。

セイシサマ一九ヒゴ五ジチカヤマニオタチヨリスダコイ、
發信局は福岡、さては色々問題の熊山御登山も氣も勇み立ち、いそ／＼岡山へ志す。
十九日は拂曉より空いと曇りて天日を見ず、御着きの五時細雨頻に臻つて暗い天候であつた
着崗された聖師様はステーションにて新聞記者の間に答へて

「晴天であつたら登山するし、天候が今日の如く悪ければ止めて龜岡へ直行する積りです」
と申されてゐた。そして又小さな聲で「熊山登山はまだ一年ばかり早い」を呟いて居られたの
で、側聞して此度は或は駄目になるかも知れないと、晴れぬ思ひで一夜を過した。追々集まる
人々の中には遠く東京より態々馳せ参じた人もあつた。

縣下の新聞は申す迄もなく、大朝大毎二大新聞が前々より可成書き立て、又新調の駕籠、揃
ひの法被がこれも可なり長い間待ち詫びてゐるので、さうか晴天にし度いものゝ願つた。

「駄目でせうか」

「この有様ではね」

浮かぬ顔をして皆がかう語り合つてゐる。

雨は益々降りしきる。抑々此度九州へ御旅立のみぎり、歸途は必ず熊山へ登るのでと申され
てゐたのを、急に變更され「かゝる重大なる神事を他の歸りがけの序に遂行するのはよくない

事である。歸つて出直してゆく」を申し出されたのであつた、だが——私は心ひそかにこの度
の御登山を神劍御發動の神事、………

バイブルの所謂「大なるミカエル立ち上れり」に相當する重大事と考へて居たので、九州お
出ましは當然なくてはならぬ、天津祝詞中の「筑紫の日向の橋の小戸の阿波岐原に御穰祓ひ
給ふ」こいふ祓戸行事にかなはせんが爲めであつて、きつと御登山になるに違ひないを獨り決
めにして居た。北村隨行に會つて聞いて見るに「岡山お立寄りの事は全然豫定されて居なかつ
た、福岡で突如として命が下つたので驚いた」この事、しかし神界では既定のプログラムであ
つたに相違あるまい。

岡山に着いて見るに、熊本縣小國支部の高野圓太氏が、ヒョックリ顔を出し「聖師様がつい
て來なはれ」を仰有つたので隨行して來ましたこいふ。これも恐らく祓戸の神様を御同行にな
つた型であらう、背の高い高野さんの後からついて行くに、何だか大幣が歩いて居るやうな氣

がしてをかしかつた。北村氏の話によれば、二十日間の御旅行中短冊一枚も書かれなかつた、未曾有の事である。さもありません、祓戸行事の眞最中であつたから従つて今日の雨も土地に對する御禊に相違ない。高をくゝつて寢につく。

明くれば二十日。午前三時より四時に亘つて篠つくばかりの大雨、五時頃より雨は上りたれ共、暗雲低迷して晴間も見えない。御出發は八時十五分。いふに……皆が顔を見合せて、心もこなさを交換して居るのみである。然るに御起床の頃より一天俄に晴れ初めて、また、くうちに全くの好天氣になつて仕舞つた。一同勇み立つてお伴する。

九時三十分萬富驛着、片尾邸に御少憩の後十時半言ふに出發、五十町の道を突破して先頭は早くも十一時半頂上に着き、社務所に少憩、一同待ち合して零時半愈々祭典の式が初まる。

嗚呼この光景、またこない偉大なる神事が今將に行はれんとして居るのである。古今東西、世界の人類が抑々何十万年待ち焦れた事の實現であらう。私は身体中を耳にして聖師様の御あ

げなきる御祭文を拜聴せうとあせつた。

「これの戒壇に永久に鎮まり給ふ掛けまくも綾に畏き主の大御神の珍の大前に謹み敬ひ畏みくも申さく」ミ、玲瓏玉を轉ばす如き御聲が聞えて來た。私は心臓の血が音を立て、高鳴るのを明かに意識した。些し聲をおこされて何か又奏上されたやうであつたが聞き取れなかつた。悲しい哉靈覺のない私には、この時に如何に莊嚴なる光景が眼前に展開したのか、少しも知る由がない。唯私の想像力は、そこに神代の儘の御英姿をもつて、素盞鳴の大神様が轟乎立ち上られ劍を按じて微笑したまふ光景を造り上げて仕舞つたのである。

やがて大本祝詞を奏上せらるゝに相和して、九天にも通ぜよこばかり奏する祝詞の聲は天地を震撼していゝ勇ましく響き渡つた。

五月の空隈なく晴れて蒸せかへるような青葉若葉の匂ひ、伽陵頻迦の聲頼りに聞えて此の世ながらの天國のさま。ボツミ上氣して汗ばみたまふ師の御前に手拭を捧げて「お目出度う御座

います』と申し上げる。『え、』と答へて頻りに汗をぬぐうて居られる。卯月八日のお釋迦様といふお姿。

お供への小餅を一々別けて下さつて式は終つた。午後一時行厨を食し、熊山神社に参拜、龜石、新池なを見られ終つて熊山神社及四五の戒壇を巡拜され、四時半再び片尾邸に入られ少憩の後、別院の敷地たるべき向山を檢分され、七時二十四分發にて岡山に引き返し一泊せられた。

道々承はつた事も左に……

あの戒壇といふのは日本五戒壇の一つと言ふのであるが、約千年位を経過して居るであらう、尊い聖跡の上に建てたものである。經の森に今一つの崩れたる大戒壇は共に其下に素尊の御髮等を埋めてあるのである。櫛稻田姫の陵も同じく三つに別れて居て、小さな戒壇と言ふのがそれである。戒壇の斯くの如く崩壊して居る言ふのは、佛法の戒律が無慥に破れた。

て仕舞つて居る事を象徴してゐる。熊山は實に靈地である。名が高熊山に似通つて居るし、此山はこゝら邊りの群山を壓して高いから其意味に於ける高熊山である。全山三つ葉躰が生茂つて居るのも面白い。四國の屋島、五劍山なども指呼の間にあり、伯耆の大山も見える。言ふではないか、此處は將來修行場にするこよいと思ふ。私は駕籠であつたから樂な筈であるが、急坂を昇つぎ上げられたのだから可なりえらかつた。諸子は徒歩だから一層えらかつたであらう、今日駕籠をかいで呉れた人達が着て居たあの法被、あれがよい、あゝいふ姿で登山して戒壇を巡拜して歩く可なりの行が出来、崩れた戒壇は積み直さねばなるまい、龜石は別に大したものでも無い、新池には白龍が住んでゐて、赤と青の綺麗な玉をもつて居る、青の方は翡翠の如く、赤の方は紅玉のやうな色をしてゐる。

弘法大師が熊山に靈場を置かうとしたのをやめて高野山にしたといふが、それは其地形が蓮華臺をして居ないからである。向山の方は蓮華臺をして其地が綾部によく似よつてゐる云々

また他にも承はつた事がありますけれど、それは實際が物語つて呉れるに存じます。

兎も角も、遂に昭和五年五月二十日、舊曆四月二十二日といふ日をもつて、神素盞鳴尊の永久に鎮まり給ひし御陵の前に立たれたのである。復活!! 神劍の發動!! かういふ叫聲が胸底から湧出して来る。日本も世界も大本もいよゝ多事になつて来さうな氣がしてならぬ。近頃のお歌日記の中から

そろ／＼三世の大峠見え初めて立ち騒ぐなりしこのたぶれが

と言ふのを見出して私の想像も滿更根底がないものでもないと思ふやうになりました。

學術上この戒壇は日本五戒壇の一と稱せられ、大和の唐勝提寺、比叡山、下野の薬師寺、九州の觀音寺と共に天下に有名なものだから、たゞ其大きさに於て他の四つに比して比較にならない程大きなもので、戒壇としても普通のものでなく、大乘戒壇であらうと考へらるゝのであるが、沼田頼輔氏や上田三平博士等も何とも見當がつかなくつたといふ事である。

莫遮、此度の御登山によつて總てが判明したのは結構な事でありました。向山は本官山といふよりも寧ろ神島にそつくりの形をしてゐて、吉野川が其麓を流れて居る有様は確に本官山に似て居ます。「今迄に大した因縁の地ではないが、汚されて居ないからよい」この事でした。そしてまた「神様の御氣勸に叶つた見え、今日の登山を無事に了する事が出来た、もしさうでなかつたらこの好天氣にはならなかつたであらう」こつけ加へられました。このお言葉から推して御神業は一年あまり進展したと考へてさしつかへあるまいと思ひます。此秋頃よりはエンヤラ巻いたの掛け聲が熊山にも向山にも盛に起る事でせうし、又私達も大急行で身魂研きにかゝらねばならないやうな氣が致します。

噴火口と蓮華台

本宮山、龜岡、皆神山は共に噴火口の跡にあるので蓮華臺をなして居るのである。是等の土地は噴火口中の中央にあつて、この部分のみが噴水せずして唯膨張せしのみで縮んで了つたものである。故にそれが蓮華の心にあたる地形をなし島として残り上古其周圍、即ち噴火口全部に水を湛へて湖水であつたのである。本宮山、皆神山は數十萬年前の噴火にかゝり、龜岡は十萬年前に噴出したもので、水の上に浮き出て居つたから、水上山の名稱が起つたのである。

(196)

お友達が欲しい

昔の友達の訪問を受ける事は、私にまつて嬉しい事の一つである。「お行儀が悪くて時にはハラ／＼する」言ふのか、それが私に取つては眞に嬉しいので、あゝした無遠慮な言葉を使ひ、態度を取つて呉れるので、私も上田喜三郎の昔にかへつて、シミジミ人間味を味はふ事が出来るのである。

近頃は穴太の人達迄が、聖師さん／＼呼び初め、友達が一人二人無くなつて仕舞つて心細い。私の友達には車夫もあれば、俠客もあるし、府縣廳の役人もあるが、友達はいつ迄も友達としておき度い。

久方の空

空の枕言葉を久方と言ふが、久方は瓢形といふ意味で、お日様とお月様をつなぎ合はす瓢箪のかたになるからさういふのである。

黄金閣上の瓢形はこの意味で造られて居るのである。

ミロクの禮拜

(197)

今の大本の禮拜、あれはミロクの拜み方言ふので、大本皇大御神守り給へ幸倍給へ二回奉稱し、次に惟神眞道彌廣大出口國直靈主命守り給へ幸倍給へ二回奉稱し、終りに惟神靈幸倍坐世ミ、二回唱へる、即ち三つの事柄を二回づゝ稱へるので三六になるのである。

(198)

再び日本刀に就て

日本刀が世界に冠絶する所以は、モリブデン（水鉛）を混入して鍛へる秘法を早くから知つて居つたからである。二三十年前から獨逸あたりでこの秘密を發見して、精巧なる軍器を造り出してゐるが、日本に於ても秘密中の秘密にして、深山に入つて造つたので、天狗に教はつたなき、稱し決して他人に教へなかつたものである。鐵も雲、因、伯の三國に限られたもので、この外から出たものでは、たゞモリブデンを混入してもさう立派なものとは出來ない。この鐵

があり、水鉛があるので細予千足の國の名に背かぬ逸品が出來たのである。素尊斬蛇の十握の劍は長船では無いか聞かすが、それは違ふ、前言ふ通り、雲、因、伯三國の中に産する鐵でなければならぬのだから、之は長船で鍛へられたものではない。

美しい人

容貌の美しい人は、心も美しい。之は靈体不二の理によつてしかあるべきであるが、美しい人であつても心の修養が足りないに、惡魔に誘はれその虜となり、外面如菩薩内心如夜叉の惡女ミなつて仕舞つて、折角の天恵を棄なしにして仕舞ふのである。美しい一口に言ふが、目鼻だちが調つて居ても、きめの荒い、毛のムジャ／＼ミ生て居るやうなのは美しい人の中に入らぬ。きめの細かな人は靈が上等である。

(199)

天 狗

天狗にも種々の階級があるが、人間界に於て責任を果さず、行が成功しなかつたものが、靈界に入つて行をして居るので、龍神と同じく三寒三熱の苦しみを受けて居るのである、地獄界の中に住するのではなく、肉体的精靈界に住するものである。行終つて後再び人間界に生れて來るもので、それから人間界の行を完全に仕遂げたならば、天國へ入つて天人の列に加はる事を得るのである。

膽力養成家

今は昔、御嶽教の主事に小野某といふ人があつて、膽力養成書と言ふ小冊子を發行し、傲然と、常に座蒲團を積み重ねてバイの化者然とこまへこみ、「假令白刃頭上に閃めくとも、絶壁前

に聳ゆとも大地震、洪水來ることも、膽力さへあれば斷じて驚くものにあらず」を豪語して居た。そこで私は小野某に向ひ「あなたは、今言はるゝ通りの度胸が据はつて居ますか」を尋ねて見た處、「勿論の事なり」を答へ乍ら腕を組んで鷹揚振りを見せてゐた。そこで私は次の間に入り、少時して一刀を抜き放ちてをざりこんでやつた。さうするに周章狼狽顔色を變へブルブル震へながら六七間ばかりころげ、庭に落ち込み兩手を合して「許して呉れ」を詫言ひた事がある。今から考へるに若氣の至りでいろんな事をやつたものだ。

又或時の事、私を刺す目的をもつて面會を求めて來た一人の若い男があつた。懷中に短刀を呑んで來て居る事がよく分つて居るので、私は火鉢に手を弱しながら、右手で火箸を鉢に構へいざと言ふ場合にはあつて灰を跳飛ばして防禦しようと思ひつゝ、「君、人を刺さうと思ふものは餘程膽力が据わつて居らねばならぬなア、自分の着物に居る蚤でも虱でも殺し盡せないものだ。まして人間を殺すと言ふ事は餘程の大膽者か、發狂者でなければ出來ない藝當だ」を言つてや

るこ、急にビリ／＼震ひ出して『さうも悪う御座いました、許して下さい』と言ひながら短刀を取り出して平謝りに謝つて、夜ふけて歸つた者もあつた。深いく信仰を持つた善人位本當の膽力の据わつたものは無いのである。

聖壇

靈界物語が何故出て來ないかと思つたら、神様が神格が違つて來たから「聖壇の上でなければ口述が出来ない」と仰つた。筆録者も齋戒沐浴、一定の衣装をつけて謹寫することになるのである。

この聖壇は、兩聖地に据ゑられるので、綾の聖地に於ては穹天閣、天恩郷にては高天閣に備へつけらるゝのである。壇は横巾三尺、縦五尺六寸七分、高さ三尺三寸、松及び檜材にて造ら

れ、下の段には十文字の梁を入れ中央に柱を立て、支持するやうにし、全体を栗色に塗る。上段は小さき勾欄にて周圍をかこんだものである。

再び素尊御陵について

熊山に於て再び數個の戒壇を發見したと言ふのか、さうであらう、さうでなければならぬ筈である。全体素盞鳴尊様の御陵は、三つの御靈に因んで三個なければならぬので、前發見のものを中心として恐らく三角形をなして居るであらうと思ふ。他の二つには御髮、御爪などが納められて居るのである。獨り素盞鳴尊様に限らず、高貴なる地位にある人々は、毛髮等の一部を葬つて、其處に墓を築き、ありし世を偲ぶの便宜としたもので、人物が偉ければ偉い程其墓は澤山あるものである。遺髮、爪などを得る事が出来ない場合は、其人の所持品例へば朝

夕使つた湯呑みか硯ごか、さう言ふものまでも墓ごして祀り崇敬の誠を致したものである。尙さうしたものも得られない場合は、其人の居つた屋敷の土を取つて来て、嘗ては故人が足跡を印した懐しい思ひ出さして、之を納め其上に墓を立て、祭つたのである。現代でも富豪なごでは自分の菩提寺に墓を持ち、又高野山に骨肉の一部を納めたる墓を持つてゐるご同様である。天照大神様の御陵なご、稱するものが方々から現はれて来るのはかういふ理由である。榊原田姫御陵も其處にあるのであるが、詳しい事は行つて見ねば判らぬ。

(204)

梅花と其實

梅の花が咲いてバラ／＼と早く散つた年は澤山實を結ぶ。これに反して、花が梢にカス／＼になつてひつついてゐる年は實のりの悪いものである。

身魂の因縁

私は女が斷り無しに背後に廻るご、ブル／＼と震へて来る。たごへそれが小さな小供であつても同様だ、私の靈は嘗て武將ごして此世に生れ出て居た事がある。元來あの本能寺の變の時信長は自殺して果てたご歴史には記されて居るが、實際はさうでなく、あゝした不時の戦ひであつたため防禦の方法もつかず、萬一雑兵の手にもかゝつて死ぬやうな事があつたならばそれこそ一代の名折れであるごいふ突嗟の考へから、阿野の局が後から薙刀でものを言はず殺めたのである。その時の記憶が甦つて来るのであらう、女が後に来るご反射的にブル／＼とする。秀吉の身魂では無いかごいふのか、さう秀吉であり、同時に家康であり、三つの御魂の活動をして居たのである、ご神様に聞かされて居る。

(205)

日本人の壽命

日本人の平均壽命は三十歳である。大學を卒業して間もなく死ぬものがあるのは、これはお土に親しまぬために起るのである。

躓く石

躓く石も縁の端し云ふ諺があるが、全く其通りであつて、敵となり味方となり、友となり仇となりなるも兎に角、幾十万年か、限り無く永劫より永劫に續く時の流れの中に、同じ時代に於て生を此世に受け、又世界十七億の人口の中にあつて、同じ國に生れる云ふ事さへも、一方ならぬ因縁であるのに、朝夕顔を合せ、同じ竈の飯を食う云ふのは、そこに深く因縁があるからである。例令同じ時代に生れ合せてを つても、一度も顔を合せる事無くして死に

行く人が、そも幾億万あるか分らない、これによつてこれを見ればほんの汽車の行きずりに一瞥を與へ合ふ人達だつて、深い因縁を有つ身魂である。因縁なくして滅多にさうした機會にあふものではない、これを思へば人々は其因縁を尊重して、周圍の人と仲良く暮さねばならぬ。況んや振り分け髪（髪を振り分ける）の昔馴染（昔馴染）は決して忘れ得ぬもの、私は境遇が如何に變化を來さうとも、永久に之等の人々を愛して行き度いのである、それが人情ではないか。

同殿同床の儀

其昔、御神殿（御神殿）といふものは、同殿同床の本義に則つて、屋内に設けられたもので、今日の如く別殿（別殿）とするのは唐制（唐制）を模倣（模倣）してから以後の事である。此度開祖様の御像を本官山上、穹天閣の私の室にお祭りして、私は其處で寝る。これで古來の通り、同殿同床（同殿同床）になつて甚だ愉快である。二代の室は次の間にある。

和歌について

歌を詠む秘訣は水の流るゝがごとく、たゞ安らかに云ふにある。瀬がきつければかたへ
の水は逆流する。そんな歌の詠み方はいけな、安らかにそして落着く所へ落ちつけばよいの
である。上手に讀まうと思ふから詠めないのである。又歌はどんな歌でも其底に淡い戀心が流
れて居なければならぬものである。

結び昆布（結婚婦）

結婚式の時結び昆布をつかふのは夫婦の縁を結び昆布云ふ意で、又親子の縁を結ぶといふ
意味であるからそれをつかつてよいが、壽留女は其意義によつて新郎新婦の間にのみ用ふべき
もので、親子間の盃の肴として使つてはならぬ。

頭槌 石槌

昭和五年四月十一日の事、静岡の長澤翁の紹介状をもつて宗教博に王仁を訪ねて来た人があ
る。白出柳助氏といつて、考古學に興味を持つて居る人であるが、今を去る事約二十年前、青
森縣中津輕郡の或地點で、林道開墾の際発見したといふ珍らしき石器一個を携へ來つて、私に
鑑定をして呉れ云ふ、元來この石器は京都、東北、北海道の各帝國大學、並に東京、京都の
兩博物館にて鑑定を請うたが、何物か一向に分らず、斯道の専門家も絶えて之を知らず、何處
に於て如何なる民族が用ゐるものなるか、其用途も分らず、歐米各國に徴するも、其類例さへ
も存せず云ふのである。これをもつて、日本中唯一無二の逸品として學術界に珍重せられて
居る、云ふのであつた。形は裁ち物庖刀に似て長さ一尺餘、茶褐色の滑かな石質、上部は平
面にして側面に溝あり、溝のつくる所に一個のイボの如きものあり下部は筒形をして居る。

之は頭槌、石槌と云つて、大古帝王又は神柱が佩びて居たものである。武器ともなり又は病氣なごを癒す道具として使用したものである。其使用法は、イボをもつて敵の眉間を打て倒したものである、だから敵を斬るのをうつこいふ事になつたのである、又上部の扁平なる部分は熱灰につけて熱し、其溝のころをちりげより脊柱に添うてあて、病氣を癒すので、たこへば灸點の如き働きをなすのである。私が靈界物語を口述してゐる際、靈眼に映ずる昔の主なる宣傳使は腰に之をさして居るので、それに擬して私も宣傳使達に御手代を渡しておいたのである。

古事記中卷神武天皇の一節

「かれその土蜘蛛を打たんごするこを明かせる歌

忍坂の 大室屋に 人さわに 來入り居り 人さわに 入り居りごも 稜威稜威し 久米の子が 頭槌石槌もち 撃ちてし止まむ みづみづし久米の子等が 頭槌石槌もち いまうたばよらし。

かく歌ひて刀を抜きて、もろごもに打ち殺しつ。

この歌の中にある頭槌、石槌がそれである。大學あたりでは模造してもつて参考にして居るし、嘗ては天覽に供した事もある。白出氏というて居るが、何分ごも稀大の珍器たるを失はな

い。

聖師より白出氏に贈られし歌

古の聖の岐美の佩せまし、今日頭槌石槌拜む

姓 名

千早振神代のさまのしのばれぬ雄仁の石槌みし

現はすのであるから、さうあるが當然である。

不知火

不知火といふのは、海神の修せらるゝ祭典である。歴史にも無ければ又科學で幾程研究しても分るものではない、人間の知らぬ火であるから不知火といふのである。

人に化けた狸

福知山にての出来事であるが、開祖様が十七八歳の頃一人の背の高い大坊主が住んで托鉢をやつて居た。五六年も其土地に居たので誰もが人間だと思つて居た。然るに或日の事某侍が彼を話して居る中、耳が頻りに動くので其故を問うと、風が吹くからだ云ふ、風が吹い

て耳が動くは怪しい、狸の類が化て居るのに相違ないといきなり抜手も見せず斬りつけて殺して仕舞つた、そして屍を川原に曝して置いた、夜が明けるに人間の姿であつた大坊主はダン／＼と變つてたう／＼狸の姿になつて仕舞つた、開祖様も實地に見に行かれたさうで、時々其事を話してをられた。

之に反對に本當の人間を狸に間違へた例もある。園部に珍妙さん云ふ尼さんが住んで居た小さな小供のやうな背をしておまけにビツコでヒヨクリ／＼と歩いて居た、言葉つきなごも小供のやうで明瞭を缺いて居た、其後園部を後に畑中云ふ所の尼寺に移り住んで居たが、或夜の事お佛前にお燈明を捧げようと思ふに生憎油が切れて居たので、徳利をさげて買ひに出掛けた。話變つて其頃新しく其村に赴任して來た駐在巡査が夜警に出るに、向ふから、小供も大人も分らぬやうな尼が油徳利をさげてやつて來る、怪しいと思つて誰何するに、畑中の尼や油を買ひに行くのやと呂律の廻らぬ小供のやうな言葉で答へたので、何、畑中から油を買ひに

行くミ、人を馬鹿にするない、化粧めがミ、サーベルの鞘で擲りつけるミ、キヤツミ叫んで倒れて仕舞つた、巡査は狸だミ信じ切つて居たので翌日其話を隣人にするミ、いやそれは全く人間だこの事、ビツクリして其後の様子を聞いて見るミ、尼さんは病床でウン／＼ミ唸り續けて居るミの話、吃驚敗亡……其後間もなく其巡査は轉任になつたミの噂を聞いた事がある。

狸が人間に化けて居るか、さうかミ云ふ事を見るためには、傍でマツチを擦つて見るミよい狸なら毛がやけるから恐れて逃げる。又體を逆さまに撫で、見ても毛がモジャ／＼ミ生て居るから分るものである。

(以上は過日某新聞紙上に狸を夫ミ思うて同棲した女ミいふ記事が出て居たのでかゝる事もあるものにやミお伺ひした時のお話であります)。

襟 首

神の作りたまひたる人間美の中で、襟首こそはその随一である。美人の價値はこれで定まるので、顔の美醜で定まるものではない、襟首は綺麗にしておくがよい。

訛事を云ふ女房の襟に惚れ

詫びて居る女房の襟に惚れ直し

打 算 か ら

〇〇さんやXXさんや四五人の人を三朝温泉に入湯にやつた。些し體が弱いから丈夫にしてやらねばならぬミ思つてネ……、長い間世間の攻撃や種々の迫害に打ち勝つて神の道に殉じて來た大本の實であるから、大切にしてやらねばならぬ。あまり勿体ないからこゝて固辭するから、何を云うてるのだ私の大切な道具だから手入れをせうミ云うのだ、私は打算上からさうせうミ

思つて居るのだ、何も氣兼ねる事は無いと云うてやつたら、さう仰せらるれば、お言葉に甘えてやらせて頂きますといつて喜んで行つたよ。全く大本の實だよ、よう辛抱して来た、散々悪口を云はれながら……。人物は大切だ、これだけに養成せうと思へば並大抵の事では無いからな、今頃斃れられては私の損害になる。

(216)

四十八の夜中

婦人妊娠の限度は四十八才の夜中までにしてある。即ち満四十八歳の夜の十二時迄受胎の可能性がある譯である、中には例外もあるけれど。

人魂

人魂の中色の赤いのは生霊であり、色の青いのは死霊である。

● 疹麻疹の薬

蕁麻疹や、其他腹に水が溜る病には、辣蕪を一瓶誰にも食べさせずに自分一人で食べるゝる。

茄子

茄子には仇花が無いといふが、其通りで、小さい時にぎんぐ取つてやるゝ一本の木に千個からなるものである。

(217)

婦人病

子宮病、ここに婦人共通の疾患である白帯下の療法としては、水一斗に鹽五合の割合をもつて温湯を造り、坐浴をするがよい。海女なごが、水につかりながら、比較的婦人病にかゝらないのは、鹽水につかつて居るからである、子宮後屈なごの機質的のものは、手術でも薬用療法でも癒らぬ。靈体一致の理によつて、心常に神に向ひ、神の光熱を受くる様になれば、それ等の病は全癒して、自然の通り位置正しく、ここにも欠陥がなくなる、人は唯神を信ずる事によつてのみ、靈体も完全にあり得るものである。

万病の妙薬

萬病に利く薬は、辣蕪である。前にも一寸話しておいたが、辣蕪は多量の酸素を含有してを

つて、心臓、肺臓、胃腸、腎臓、脚氣等凡ゆる病氣に特效がある其上に、血液を清淨にし循環をよくし、水氣をこる故に水腫の病に使用し、又利尿劑としても顯著な効能があるもので下熱劑にしても、收斂劑としても有効である。食時に際し、副食物として居るミかういふ病は自ら全治するものである。要するに内臓一切の病氣に利くのである。但し一個の瓶は一人の専有として、他の人に食べさせてはいけないのである。其理由は、多人數よつて一瓶を食するときは、靈がこもらぬからである。

たむしの薬

たむし、水かさ、ひぜんなきにはクレオソートをつけるミよい。

クレオソートをつけるミ可なり劇しい痛みを感じるものであるが、非常に効果がある、然し

ながらひどく痛みを感じるやうなれば、薄めて使用したがよろしい。京都分所の中村宣傳使は多年頑強に襲つて居た顔面のタムシが一回のクレオソート塗布で全治した、然しかなりの痛みを感じ、一時は人前にも出られないやうな皮膚の色になつたが、三四日でそれがきれいに癒つて仕舞つたご報告がありました。

(220)

便所の臭氣ごめ

桐の葉を便所に入れておくに虫が湧かない、臭氣止めにもなる。

痔の治療法

鹽のにがりで患部を洗滌するいである。但しシミて痛みを感じるものであるから、豫め神

様に、甚く痛まぬ様お願ひをして後にするがよい、さうするに痛くなく樂に癒る。

血止めの法について

半紙の右邊を、右手に持ち、左手に左邊を持ち、一二が二ミ稱へて二つに折り、右の手にて持ち、次に二二が四ミ稱へ上方より二つに折り、右手にて持ち、次に二四が八ミ稱へて、左より右に折り、其儘場所に當てる、此際決して手を離してはならぬ。

筆者申す、最近の事實宣傳使剃刀にて顔を傷つけられし際、この法を實施せしに、忽ちし出血止まりたれば大いに驚き合ひました。

脾肝の虫の薬

(221)

脾肝のむしこいつて小供がかゝる病氣がある。私も小さい時それに罹つて長らく苦しんだがそれには、いぼがへるの肉をつけ焼にして食べるこよい。綺麗な鶏の笹身のやうな肉である

(222)

肺病について

肺病になま葱が効能あることは嘗て話しておいたが、それには一つの條件が伴ふので、其條件といふのは男女の交りをたつ事である。断つて云うても一生涯たつて云ふのではなく、病氣の時だけで、全快した後は勿論差支えないのであるが、その辛抱が出来ないでみす／＼大切な命を失ふ者があるのは情ない事である。肺病の中でも咯血するのは一番性質のよいもので、悪いものを皆略き出して仕舞ふのであるから、性交さへ慎んだらきつて癒るのである。

今は昔の話となつたが京都にNといふ男があつて、人妻であるTと云ふ女と通じて不都合の

ありたけを盡す。Tは全く亭主を尻に敷いて、情夫と共にあれせい、これせいと命令を下す。お人よしの亭主は諾々として其命令に服従するといふ風で、全くお話にならぬ。私が矢筈しう云うて叱つてやるに、其時は神妙に改心するのであるが、しばらくするに、又本の木阿彌、これは相方に夫婦の狐がついて居たのである。Nは肺病にかゝつて居たので、「男女の交りをたぬに三年の中に命が終るからよせ」と云ふに、「仰せの通り三年にして命が終つてもよろしい、好きな事をして死にまう御座います、好きな事せん位なら生きて居ても仕方がないのです」と云うて聞かなかつたので、まう／＼死んで仕舞つた。狐の生活をしようといふのだから仕方がない、其狐が又或人に憑依して仕舞つたのだが、其人は神の道に居ながら、性的生活に没頭して仕舞つて、人間の能事了はれり云ふ有様である。人間が肺病にかゝるに、兎角情慾が昂進するもので、これを抑切る勇氣が偽いに到底助からぬのである。

(223)

再び血止めの法について

半紙の上を指にて、イロハニホへ、ミ唱へつゝ右回轉に圓を描き押さへ、最後にトミ唱へて圓の中央を人さし指でおさへ、其紙を出血部に當てるこ、直ちに止まる。

瘡なごを直すには、同様紙上を指にてイロハニホヘトチリヌルヲカヨタレソツネナラムまで唱へながら前ミ同じく圓形に押さへ、最後にウシ、ウシ、ウシ、ミ三遍唱へて瘡の上に其紙を當てるのである。

腫物は又、紙を二分位の巾に切り、腫物の周圍を取り巻き、其紙の上に、南、南、南ミ澤山書いておけば痛みが止まり、だんくミ癒つて来る。齒のうづく時も同様の處理で癒る。腫物の痕跡を取るには同上の形式に北、北、北ミ書くのである。古い痕跡は同じ形式で、中、中、中ミ書いておくのである。綺麗に取れて仕舞ふ。

腋臭の根治法

ワキガを根治するには、お土を三週間つゞけて塗付するのである。お土がすつかり微菌を吸ひ取つて仕舞ふので、臭氣がなくなるのである。

中風、百日咳、喘息

中風、百日咳、喘息これ等の病には殆んど薬はない。百日咳ミ喘息ミは私の吸うた煙草の吸ひ残しを吸うて癒つたミ云ふ人が澤山あるが、……中風は信仰の足らない所から起るので、身体の一部、或は殆んど全部を惡靈に占領されて居るのである。一生懸命に信仰するより外に方法は無い。だが樂燒の初竈の茶碗で茶を喫んでゐるこ、此病氣に罹らぬものである。

筆者申す、初竈ミいふのは樂燒の竈を築いて最初に焼いたもので、初竈は數が少いものであ

るから、普通値の十倍に價するものださうです。此度明光社附屬の第二工場で新に竈を築いて、聖師様御自作の樂焼を焼かれましたが、其初竈を明光社員其他四五の人々に下げられました。これこそは、中風豫防の天來の福音、天下の名器と存じます。一寸お知らせ申上げておきます。尙ほ百日咳、喘息の方が聖師様おすひのこりの巻煙草を吸うて、お蔭を頂かれ癒された方は、枚擧に遑ない位で御座います。百日咳になやむお見さんならば、お母さんが吸うて、其煙を吹きかけて上げらるゝこよいのです。

肉 食

止むを得ず豚の肉なごを食へる時は、「四つ脚、四つ脚、四つ脚」を云うて食へる。濟んで仕舞うに、「神様、神様」を云ふ。さうすれば、痛みかゝつたお腹もすぐ癒つて仕舞ふ。

太平柿の歌

お腹が膨れる病には、國依別が詠んだ太平柿の歌を拜讀する。全癒する。(海洋萬里、寅の卷、自二〇七頁至二四七頁参照)

國依別

龍神の柿食て布袋になつチャール腹は忽ちへースなるらん。

柿こつて見ればへースが當りまへ腹ふくれチャール道理わからぬ。

チャール、へース、國依別も諸共に天のはらから下りけるかな。

ハラ／＼涙流してはらを撫で柿を盗んだ腹いせに逢ひ。

腹が立てきも仕方なし

龍神腹を立てたのか

汝は横に長い奴

腹立通しもならうまい

高天原にあれませる百の神たち。大海原にあれませる逸秋津姫神。

はらの悩みを祓ひ玉へ清め玉へ。

ハラ／＼に降り来る雨に空晴れて大蛇の空も澄み渡りけり」

ミ口から出任せの腰折歌を詠ひ乍ら、チャール、ヘースの眞中にチヨコナンミ坐り、兩人の布袋を兩方の手で撫で廻して居る。薄紙を剥いだ様に二人の腹は漸次容積を減じて來た。

國依別

「それ見たか女房が撫でるふぐの腹

オツトドツコイ

それ見たか國依なでる柿つばら

天津神國津神はらひ玉へ清め玉へ

高山の伊保理短山の伊保理

かき分けて聞し召せよ

これが盲の柿のぞき

かき出せ／＼

今が二人の生命の瀬戸際

皇大神の守る身は

大蛇あるまい二人連れ

御靈幸はひまし／＼て

片時も早く救はせ玉へ

國依別より入でし事

何卒早く兩人の腹をひすぼらせ

舊の元氣に恢復せしめ玉へ

あゝ惟神靈幸倍坐世」

ミ一生懸命に汗みぎろになつて祈念し乍ら兩手にて兩人の腹を撫で下した。神德忽ち現はれ、

二人は半時餘りの間に元の如くになつて了つた。四五の供人も國依別の祈願によつて忽ち全快せしこころを感謝し、各々口を揃へて、『國依別の生神様』に合掌するのであつた。

(230)

ピアノ式按摩

肩や背中が凝つた時には指の先で打つのが一番効果があるもので、平手で揉んだり、握り拳で叩くよりずっとよいのである、かうして按摩するにこそ等あたりが痒くなつて来る、これは血液の循環が速になつて来るからであつて、かくして大概の凝りは直に癒るものである。私にはこれをピアノ式按摩と名づけて居る。

咳の妙薬

桐の花を蔭干にして、それをホイロにかけ粉にしてほんのつまみ（茶匙四分の一量）位飲めば直に止まるものである。咳にはこれが妙薬である。

病氣の薬

池に生ずる菱云ふ水草を蔓も葉も、實も一緒に取つて蔭干にして置いて煎じて飲む。胃潰瘍によくきく、又胃瘡にも卓効がある。

土用の丑の日に摘んだ蓬を煎じて飲めばどんな重い痔でも癒る。

青木葉を煎じて猪口に一杯位づゝ飲み、又それを以て患部をなてる。大概なリウマチスは治る、但しひどく慢性になつて居るものには利かぬかも知れぬ。

雁瘡には、燈明の油のをりを以て、垣根を結んだ朽ち繩を焼いて灰にしたものを溶き、それ

(231)

を患部に貼付すれば治る。

中耳炎には薬はない、一向神様にお頼りするより外仕方が無いものである。

梨は病人の食物として最も結構なもので、昔の諺に「夏の病人梨より食ひつく」といふのがあるが、食慾の無い病人には梨を與へるこゝ、それから食事を攝るやうになる。

痲病には西瓜が妙薬である。

此の神示の薬に依つて御神徳を頂き全癒された方は筆者宛御通知を願ひ度う存じます。

食ひ合せについて

梅^{うめ}、鰻^{うなぎ}、南瓜^{かぼちゃ}、梅^{うめ}。共に食ひ合せるこゝいけなない。梅^{うめ}、鰻^{うなぎ}、南瓜^{かぼちゃ}、三つを食ひ合すこゝ壞血病^{くわいけつびょう}を起したり、胃腸病^{いちょうびょう}を起し一命^{いちめい}にもかゝはる。だから其一つを食べたら必ず二十四時間^{じゅうにじゅうよんじかん}を経な

ければ他のものを食べてはならぬ。

眼瞼に入つた塵

汽車で旅行する場合、こもすれば煤煙^{ばいえん}に交つて塵埃^{ちんがい}なごが眼瞼^{がんげん}に入つて困るこゝがある、さういふ場合簡單^{かんたん}に之を治すには、もし上眼瞼^{じやうがんげん}に塵埃^{ちんがい}が入つたなら上眼瞼^{じやうがんげん}を持ちあげて下眼瞼^{したがんげん}を其中^{そのなか}に押し入れ靜かに放すのである、下に入つた場合には下眼瞼^{したがんげん}を持ち上げて上眼瞼^{じやうがんげん}を其中^{そのなか}に押し込み靜かに放つ、かくすれば睫毛^{まつげ}は小さなブラツシの働きをなして掃除^{そうじ}をして呉れるので塵埃^{ちんがい}は譯^{わけ}なく出る、人間の體^{からだ}はかくの如く微妙^{びみょう}に神様^{かみさま}が作つて居られるのである。

小判の効能

心臓病、肺病等の病氣には小判を煎じて飲ましてやる。卓効があるものである、すべて金は人間の體にはよいもので、齒の金冠なごも知らずく、金氣が体内に入つてよい結果をおよぼすものである。この理に於て純金ならば、何でもよいやうなものであるが、實際なるごやつぱり小判がよいので、小判にはそれだけの位があるのである。

(234)

田虫の妙薬

田虫、錢虫なごには飯粒に鯉節の削いたのをまぜ、ねつてつけるごよい、きれいに癒る。

臭氣ごめ其他

鶏肉の厭な臭氣を消すには、料理をする前に濃く曹達を溶かした水で洗う。臭氣は去るもの

である。

火傷した時は直ぐに其局部に水を塗り附けた上、熱灰をかける。痛みが去る。また茄卵の灰を火傷に貼るご直ぐに痛みが止まるものである。

重炭酸曹達を水にまかして風呂に入れるご、ブンミ臭ふ汗じみた厭な臭氣がなくなるものである。

雪陰の臭氣を消すには、桐の葉を二三枚投すれば直ちに止まるものである。

一石の濁水に明礬一握りを投入すれば忽ち清水となり飲料となる。

(235)

十和田湖の神秘

十和田湖の神秘

東洋の日本國は到る所山紫水明の點に於て西洋の瑞西と共に世界の双璧と推稱されて居る。日本は古來東海の蓬萊嶋と稱へられた丈あつて、國中到る處に名山があり、幽谷があり、大湖があり、大飛瀑があり、實に世界の公園の名に背かない風光がある。中に湖水にして最も廣大に最も名高きものは近江の琵琶湖、言靈學上、「天の眞奈井」があり近江八景といつて支那瀟湘八景に倣つた名勝がある。蘆の湖、中禪寺湖、猪苗代湖、支笏湖、洞爺湖、阿寒湖、十和田湖などがある、何れも文人墨客に喜ばれて居るものである。中にも風景絶佳にして深き神秘を傳説を有するものは十和田湖の右に出づるものは無いであらう。自分は今度東北地方宣傳の旅を續け、其途中青森縣下其他近縣の宣信徒に案内されて、日本唯一の紫明境なる十和田の勝景に接する事を得るに共に、神界の御經綸の深遠微妙にして人心凡智の窺知し得ざる神秘を覺る事

を得たのである。扱て十和田湖の位置は、裏日本と表日本とを縦断する馬背の如き中央山脈の間に介在して、北方には八甲田山、磐木山など巍々乎として聳え立ち、南方遙の雲表より鳥海山、岩手山の二高嶺が下瞰してゐるのである。十和田湖の水面の高さは海拔一千二百尺にしてその周囲の山々は之より約二千尺以上の高山を以て環繞せられ、湖面は殆んど圓形にして牛角形と馬蹄形とを爲せる二大半嶋が湖心に向つて約一里斗り突出し、御倉山御中山など神代の神座や神名に因んだ奇勝絶景を以て形造られて居る。湖中の岩壁や、岩岬や、嶋嶼などの風致は實に日本八景の隨一の名に背かない事を諾かれるのである。湖中の風景の絶妙なる事は、一爰に記すまでもなく東北日記に名所くを詠んでおいたから、爰には之を省略して十和田湖の神祕に移ることにしようと思ふ。

十和田湖の傳説は各方面に點在して頗る範圍は廣いが、自分は凡ての傳説に拘はらないで、神界の祕庫を開いて爰に忌憚なく發表する事とする。扱十和田の地名に就ては十瀬田、十曲田

などの文字を宛はめて居るが、アイヌ語のトワタラ(岩間の湖)ハツタラ(淵の義)が神祕的傳説中の主要人物、十和田湖を造つたといふ八郎(別名、八太郎、八郎太郎、八の太郎)が傳説の中心となつて居る。次に開創鎮座せし藤原男裝坊も南祖、南宗、南僧、南會、南藏等種々あるが、今日普通に用ゐられて居る文字は南祖である。然し王仁は傳説の真相から考察して男裝坊を採用し、此神祕を書く事にする。

昔秋田縣の赤吉云ふ所に大日別當了觀云ふ有徳の士が住んで居たが、たま／＼心中に邪念の萌した時は北沼といふ沼に年古くから棲んでゐる大蛇の主が了觀の姿になつて妻の許へそつと通つた。斯の大蛇の主といふのは神代の昔神素戔鳴尊が伯耆大山即ち日の川上山に於て八岐の大蛇を退治され、大黒主の鬼雲別以下を平定されたその時の八岐の大蛇の辨魂が凝つて再び大蛇となり、北沼に永く潛んでゐたものであつた。間もなく了觀の妻は妊娠し、やがて玉の如き男子を生み落したが、恰も出産の當日は朝來天地晦冥大暴風雨起り來りて大日堂も破れ

ん斗りなりしこいふ。了観はその恐ろしさに妻子を連れて鹿角へ逃げその男子を久内と名付けて慈しみ育てた。その後三代目の久内は小豆澤に大日堂を建立したるも身魂蛇性のため天日
を仰ぎ見るこ能はず、別當になれない所から草木村といふ所の民家に代々久内と名告つて子
孫が暮して居た、扱てその九代目に當る久内の子八郎が神祕傳説の主人公である。

日本一勝地何處も人間はゞ十和田の湖と吾れは答へむ。

神國の八景の一と推されたる十和田湖岸の絶妙なるかな。

水面は海拔一千二百尺十和田の湖の風致妙なり。

磐木山八甲田山繞らして神祕も深き十和田の湖かな。

我國に勝地は數多ありながら十和田の景色にまさるものなし。

御倉山御中山なご神祕的半嶋浮ぶ十和田の湖かな。

水青く山又青く湖廣く水底深き十和田の勝かな。

男裝坊創開したる十和田湖の百景何れも神祕的なる。

八郎が大蛇と變じ造りしと云ふ十和田湖の百の傳説。

素戔鳴の神の言向け和したる大蛇の靈は十和田に潛みぬ。

風雅なる人の春秋訪ね來て風光めづる十和田湖美はし。

了観の妻の生みてし男の子こそ北沼大蛇の胤なりしなり。

天も地も晦暝風雨荒れ狂ふ中に生れし久内は蛇の子。

九代目の久内が生みし男の子こそ十和田を造りし八郎なりけり。

藤原の男裝坊が八郎と争ひ得たる十和田の湖かな。

瑞御魂神の任さしの神業に仕へ奉りし男裝坊かな。

八郎を追ひ出したる男裝坊は永く十和田の主となりける。

何時の世にか、青山綠峰に四方を繞まれたる清澄なる一筋の清流を抱いて眠る農村の昔秋田

縣鹿角郡の東に南の山峽に草木こいふ夢のやうな静寂な農村があつた。此村に父祖傳來住んで居る久内夫婦の仲に儲けた男の子を八郎と名づけ、両親は蝶よ花よ慈しみ育くむ間に八郎は早くも十八歳の春を迎ふる事となつた。八郎は天性の偉丈夫で、母の腹から出生した時既に大人の面貌を具へ一人で立ち歩きなごをしたのである。八郎が十八歳の春には身長六尺に餘つて大力無双鬼神を凌ぐ如き雄々しき若者であつたが又一面には至つて孝心深く村人より褒め稱へられて居た。八郎は持前の強力を資本に毎日深山を馳け廻つて樺の皮を剥いたり、鳥獸を捕へては市に賣捌き得たる金にて貧しい老親を慰めつゝ細き一家の生計を支へて居たのである。或る時八郎は隣村なる三治、喜藤といふ若者三三人連れにて遠く樺の皮剥きに出掛けた三人は來滿峠から小國山を越へ遙々津久子森、赤倉、尾國三つの大嶽に圍まれてゐる奥入瀬の十和田へやつてきた、往時の十和田は三つの大嶽に狹められた溪谷で晝尙ほ暗き緑樹は千古の色をたゞへ其の中を玲瓏たる一管の清流が長く南より北へ延びてゐた。三人は漸々此處へ

進りついたので流れの邊りに小屋をかけ交り番に炊事を引受けて晝夜樺の皮を剥いて働き續けて居た。

草木村久内夫婦のその中に大蛇の靈魂八郎生れし。

奥入瀬清流渡り八郎は溪間の湖沼に友と着きたり。

孝行の譽れ四隣に聞へたる八郎は樺の皮脱ぎて生く。

三治、喜藤二人の友と溪流を渡りて十和田の近くに假寝す。

奥入瀬川の邊りに小屋造り鳥獸を狩り樺の皮剥ぐ。

数日後のこゝ、其日は八郎が炊事番に當り、二人の出掛けたる跡にて水なりと汲みおかんとて岸邊に徐々下り行くに、清き流れの中に、岩魚が三尾心地よげに遊泳して居るのを見た。八郎は物珍らしげに岩魚を捕つて番小屋に販つて来た、そして三人が一尾つゝ食はんこ焼いて友二人の歸りを待つて居たが、その匂ひの溢れる斗りに芳しいのでこゝでも堪らず一寸つまんで

少々斗り口に入れた時の美味さ、八郎は遂に自分の分を分ちして一尾だけ食つて了つた。

清流に遊ぶ岩魚を三尾捕り焼き付け見れば芳味溢るゝ。

芳ばしき匂ひに八郎たまり兼ね自分の分を分ちし一尾喰らへり。

俺は未だ斯んな美味いものは口にした事は一度も無いが彼はかすかに残る口邊の美味に酔ふた。後に残れる二尾の岩魚は二人の友の分を分ちしてあつた。けれども八郎は辛抱が仕切れなくなつて何時の間にかさうく残りの分二尾も平げて了つた。アツつたと思つたが後の祭りでも如何にも證衛がなくなつた。八郎は二人の友に對して何もなく濟まないやうな氣持を抱くのであつた。間もなく八郎は咽喉が焼きつく如うに渴いて來た、口から烈火の焰が燃へ立つてきても依然として居られなく成つたので、傍に汲んで來て置いた桶の清水をゴクリ／＼と呑み干したが又直ぐに咽喉が渴いて來るので一杯二杯三杯四杯と飲み續けたが未だ咽喉の渴きは止まらず反て激しくなる斗りである。ア、堪らない、死んで了ひさうだ、是は又何をした事だらうと

呻き乍ら澤邊に駆け下るや否や、いきなり奔流に口をつけた。そして其儘澤の水も盡きん斗りに飲んで飲んで飲み續け、恰度正午頃から、日没の頃ほひまで、瞬間も休まず息もつがず飲みつゞけて顔を上げた時、清流に映じた自分の顔を眺めて思はずアツと倒るゝ斗り驚きの聲を揚げた。嗚呼無慘なるかな、手も足も棒の如く肥り、眼の色さし等既に此の世のものでは無かつた。折から山へ働きに行つて居た二人は歸つて來て、此始末に膽を潰す斗り驚愕して了つた。オ、イ八郎々々二人が聲を合せて呼べば、その聲にハツと氣付いた八郎は漸くにして顔をあげ、恐ろしい形相で二人の友をじつと眺めてからやがて口を開いた。

八郎は岩魚の美味に堪へ切れず二人の友の分まで喰らへり。

魚喰ひし跡より咽喉が渴き出し矢庭に桶の汲置水呑む。

桶の水幾許飲みても飲み足らず清き溪流に口を入れたり。

正午より夕刻までも澤の水飲み續けたり渴ける八郎。

溪流に寫れる己れの姿見て八郎倒れん斗りに驚く。

八郎の姿は最早現し世の物とも見えぬ形相姿まじ。

手も足も樽の如くにはれ上り二夕目に見られぬあはれ八郎。

夕方に二人は小屋に立歸り八郎の姿に魂を消したり。

八郎は夕刻二人の友の歸つたのを見て少時無言の後やつ三口を開き、お前達は歸つて來たのが云へば二人はオイ八郎一体お前の姿は何だ。如何して斯うなつた。淺間敷い事になつたのさあ住所へ歸らうよ、地震へ聲を押し沈めて言つた時八郎は腫れあがつた目に一杯涙を浮べて、もう俺はどこへも行く事は出来ない身體になつて了つたのだ。何云ふ因果か知らぬが魔性になつた俺は寸時も水から離れられないのだ。これから俺は此處に濁を造つて主になるからお前達は小屋から俺の笠を持つて家に残つて居られる親達へ此事を話して呉れろ。ア、親達はごんなに歎かれるだらうと兩眼に夕立の雨を流して嘆ずる聲は四圍の山々に反響して又さうと

筋するのであつた。かくては果しと二人は、八郎よ俺たち二人は爰で永の別れをする。八郎よさらばと名残惜し氣に十和田を去つた。二人の立去る姿を見ましてから八郎は尙も水を飲み續ける事三十四晝夜であつたが、八郎の姿は早くも蛇身に變化し、やがて十口より流れ入る澤を堰止めて満々とした一大碧湖を造り二十餘丈の大蛇になつてさんぶと斗り水中に深く沈んで了つた。かくして十和田湖は八郎を主として、年移り星變り數千年の星霜は過ぎた。永遠の静寂を以て眠つて居た一大碧湖の沈黙は遂に貞觀の頃になつて破らるゝに至つたのである。

八郎は二人の友に涙もて永き別れを告げて悲しむ。

兩親の記念と笠を友に渡し十和田の湖の主になりけり。

八郎は三十四夜の水を呑み續けて遂に蛇体と變化す。

二十餘丈大蛇となりて八郎は十和田湖深く身を沈めたり。

十口の流れをせきて永久の住所十和田の湖を作れり。

數千年沈黙の幕破れけり貞觀年中男裝坊にて。

貞觀十三年春四月、京都綾小路關白ミして名高い、藤原是實公は讒者の毒舌に觸れ最愛の妻子を伴ひ、櫻花亂れ散る京都の春を後に人づても無き陸奥地方をさして放浪の旅行を續けらるる事ミなつた。一行總勢三十八人は奥州路を踏破し、やがて氣仙の岡に辿りついて爰に假の舍殿を造營し、暫時の疲れを休められた。間も無く是實公他界せられ、その嫡子は行公の代なるや、元來公家の慣習ミして、何んの營業も無く、貧苦漸く迫り來たりたる爲、今は供人共も各自に業を求めて各地に離散してしまひ、是行公は止を得ず、奥方のかよわき脚を急がせつゝ假の舍殿を立出で、北方の空を指して、落ち行き給ひし狀は、實にあはれなる次第であつた。斯くて日を重ね、月を閲して三ノ戸郡の糖部へ着かれ、何所か適當なる住處を求めんミ、彼方此方尋ね歩行かれたが、一望荒寥ミした北地の事ミて、人家稀薄依るべきものなく、村らしき村も見えず、困苦をなめ乍ら、やがて馬淵川の邊りまで行つて來られたが渡るべき橋さへもな

く、又船も無いので、途方に暮れ乍ら夫婦は暫時河面を眺めて茫然たる斗であつた。かくてはならじミ二人は勇氣を起し川添ひに雜草を踏み分け三里斗り上りし思ほしき頃、目前に二三十軒の人家が見えた。是行公は雀躍して、奥よ喜べ、人家が見へるミ慰めつゝやがて靈驗觀音の御堂へミ着かれた、そして其夜は御堂内に入りて足を休め又明日の旅路をつくぐ思ひ悩みつゝ、まんじりミも出來なかつたのである。

その翌日は行公の室へ這入つて來た別當は威儀を正して「何處ミなく床しき御方に見え候も、何れより御越しなるや、お構ひなくば大略の御模様御話し下され度し」ミ言葉もしミやかに述ぶる狀は、普通の別當ミは見えず、必ずや由緒ある人の裔ならんミ思はれた。是行公は「吾等は名もなき落人なるが、昨夜來より手厚き御世話に預り、御禮の言葉も無し。願はくは後々までも忘れぬため、苦しからずば此の靈驗觀音堂の由來をきかせ玉へ」ミ言葉を低うして訊ぬるに、彼の別當は襟を正し乍ら「さればに候、拙者は藤原の式部ミ申す者にて、抑々吾祖

先は藤原佐富治部卿ミ申す公家の由にて讒者のため都より遙々此處に落ち、柴の庵を結びこの土地を拓きて住めるなり、現在にては百姓も追々相集り斯の如く、一つの村を造りしものにて此觀音堂は村人が我祖先を觀音に祀りたるものにして、近郷の産土神にて候、扱て又御身は都よりの落人の田、何故斯様なる土地へミお越し遊ばされしや」ミ重ねぬの問ひに是行公は懐しげに、式部の顔を打ち眺め「あ、扱ては貴公は吾一族なりしか、吾祖先も藤原の姓、父上までは關白職なりしも、無實の罪に沈み、斯く流人ミなりたり。只今承はれば貴公も藤原ミ聞、系圖なきや」ミ問はれて式部は早速大切に藏めてあつた家の系圖を取り出し、披き見るに是行公は本家にて、式部は末家筋なれば、式部思はず後に飛び去つて言ふには、「扱てもく、不思議の御縁かな。是ミ申すも御先祖の御引合せならむ。此上は此處に御住居あらば、我等は家來同様にして、御世話申す可し」ミ是より是行公ミ式部は兄弟の契を結び、是行公は兄ミなつて、名を宗善に改め給うたのである。

貞觀の昔關白是實公は讒者の爲に都を落ちます。

綾小路關白ミして名高かりし是實公の末路偲ばゆ。

妻や子や伴人三十八名ミみちのく指して落ち行く關白。

櫻花春の名残ミ亂れ散る都を後に落ち行くあはれさ。

みちのくの氣仙の岡に辿りつき假の舍殿を營み住ませり。

是實公間も無く世をば去り玉ひ嫡子は行公の代ミなる。

營みを知らぬは公家の常ミして貧苦日にノ、迫り來にける。

伴人も貧苦のために彼方此方ミ業を求めて亂れ散りける。

是行公奥方伴ない家を出て北の方さして進みたまへる。

三ノ戸の郡糖部につきたまひ一望百里の荒野に迷へり。

馬淵川橋なきまゝに渡り得ず草村わけつゝ三里餘上れり。

二三十戸人家の棟の見え初めて夫婦は蘇生の喜びに泣く。

是行公觀音堂が目にもまり爰に二人は一夜明かせり。

觀音堂別當室に入り來たり不思議の邂逅に歎び合へり。

別當は藤原式部その昔祖先は關白職なりしなり。

是行式部は爰に兄弟の約を結びて永く住みけり。

是行公名を宗善と改めてこの山奥に半生を送る。

爰に藤原是行公の改名宗善は式部の計らいに由つて、三ノ戸郡仁賀村を安住の地と定めて何不自由なく暮してゐるが、只々心に掛るは世繼の子の無い事であつた。ア、子が欲しい〜と嘆息の言葉を聞く度に奥方は秘かに思ふやう、もう此の上は神佛に祈願を籠めて一子を授からんものゝ靈驗堂の觀音に三七二十一日の參籠を爲し、願はくば妾等此の儘にして此土地に朽ち果つるも、子の成人したる曉は再び都へ歸參して、關白職を得るやうな器量ある男子を授

け給へし一心不亂に祈つて居る中、恰度二十一日の滿願の夜のこと、日夜の疲勞に耐へ兼ね思はず神前にうき〜とまごろめば、何處にもなく偉大なる神人の姿現はれて宣たまふやう、汝の願に任せ、一子を授けむ。されどもその子は必ず彌勒の出世を願ふ可し、夢々疑ふ勿れ、我は瑞の御靈神素盞鳴尊なりて御手に持たせ給へる金扇を奥方玉子の君に授けて忽ちその御姿は消へさせられた。夢よりさめたる奥方玉子の君は、夫の宗善に夢の次第を審さに告げられしが、間もなく懷胎の身になり月滿ちて生れ落ちたは玉のやうな男と思ひの外女の子であつた夫婦は且つ喜び且つ女子なりしを惜しみつゝ蝶よ花よと育みつゝ七歳になつた。夫婦は男子なれば都に還りて再び藤原家を起し、關白職を繼がせんとした望みは俄然外づれたれども、今この間に男装をさせ、飽くまでも男子として祖先の家名を再興させんものゝ、名を南祖丸と付けたのであるが、誰いふもなく女子が男装して居るのだ、それで男装坊と稱ふるやうになつたのは是非なき仕儀と言はねばならぬ。

然るに生者必滅會者定離のたこへにもれず、痛ましや南祖丸が七歳になつた秋、母親の玉子の君は不圖した原因で病床に伏したる限り日夜病勢重る斗りて、最早生命は旦夕に迫つて來たので南祖丸を枕邊近く呼びよせて言ふ。

『お前は神の申し子で母が一子を授からんこ靈驗堂へ三七日間參籠せし時、瑞の御靈神素盞鳴神より、生れたる子は彌勒の出生を願ふべしこの夢の御告げありたり。汝は此母の亡き後までも此の事斗りは忘るなよ』

こ苦しき息の下から物語りして遂に歸らぬ旅に赴いて了つたのである。

仁賀村に宗善夫婦は不自由なく安住したり式部の好意に。

世濶ぎの子無きを悲しみ宗善の妻は觀音堂に籠れり。

立派なる男子を生みて關白家再興せんこ日夜に祈れり。

素盞鳴の神が夢に夜現れて子を授けんこ宣らせ給へり。

瑞御靈授け給ひし貴の子は彌勒出生を願ふ女子なる。

月満ちて生れたる子は男裝させ名も南祖丸につけて育くむ。

南祖丸七歳の時母親は神示を南祖に告げて世を去る。

彌勒の世來さんとして素の神は神子をば女こ生ませ玉へる。

南祖丸初め父の宗善、式部夫婦等が涙の裡に野邊の送りをやつこ濟ませた後、父宗善は熟々南祖丸を見るに年は幼けれごも手習ひ學問に精を出し恰も一を聞いて十を悟るの賢さ、是が眞正の男子ならば成人の後京都に還り祖先の名を顯はして吾家を關白家に捻ぢ直す器量は十分であらう。併し乍ら生來の女子如何に骨格容貌の男子に似たりこて妻を娶り子孫を生む事不可能なり。乳兒の頃より男子こして養育したれば世人は之を女子こ知る者なかる可し。如かず變生男子の願ひを立て此の儘男子こして世に處せしめ、神佛に仕へしめん。誠や一子出家すれば九族天に生ずこかや。亡き妻の願望に由りて神より與へられたる子なれば家名再興の野心は、流水

の如く捨去り、僧になつて吾妻の菩提を弔はしめん。決心の膽を固め、奥方の死より三日後、同郡五戸在七崎の觀音別當永福寺の住僧なる徳望高き月志法印に頼みて弟子になし、その名も南僧坊と呼び修行させる事になつた。

宗善は公家再興の念を捨て南祖丸をば出家になしたり。

七崎の觀音別當月志法印南祖丸をば弟子にし教へし。

爰に力に頼みし妻を失ひ愛兒南祖丸を月志法印に托した宗善は今は何をか楽しまんて馬を數多牧し老後を慰め暮して居た。

然るに不可思議なる事は如何なる悍馬も宗善の厩に入れば直に悪癖が直り名馬に化るのを見て、里人は何れも之を奇しし宗善の没後には宗善の靈を祀りて一字を建立し馬頭觀音と稱へ其徳を偲んで居るが、奥州南部地方の習慣として馬頭觀音を若前(宗善)と言ひ、又宗善は繪馬を描く事を樂しみにしてゐたので後世に至るで繪馬を御堂へ奉納する風習が残つたのである。そし

て永福寺へ弟子入をした南僧坊は日夜學問を勵みその明智、非凡絶倫には月志法印も舌を捲いて感嘆するのであつた。かくて其後數年を過ぎ南僧坊は茲に十三歳の春を迎ふるに到つた。

圓明鏡の如き清らかな念佛修行、はら／＼に散る櫻花の下に南僧坊は冥想に耽つて居た。幽寂の鐘の音は止んで夕暮近き頃、冥想よりフト我に歸つて彼方の大空を眺め、亡き母が臨終の遺言をちつと考へ込んだ。ア、我母上は枕頭に吾を招き苦しき息の下から「彌勒の出世の大願を忘るゝ勿れ」言はれた。ア、彌勒—彌勒出世の大願、然し乍ら自力にてはこても叶ふべくも無い。是より吾は紀伊國熊野へ參詣して神力を祈りながら大願成就せんもの決心を固め師の坊月志法印へ熊野參詣の志望を申し出でたが、まだ幼者だからこゝ許されなかつた。南僧坊は今是非なく或夜密かに寺門を抜け出し七崎の村を後に遙々紀伊路を指して出發してしまつた。

宗善は妻に別れて樂しまず遂に馬飼人になりけり。

荒馬も宗善伺へば忽ちに良馬なるぞ不思議なりけり。

宗善の死後は里人宗善を觀音堂建て祀り籠めたり。

宗善を蒼前馬頭觀音に齋き祀れば良馬生るゝ。

宗善は繪馬を好みて描きたれば後人繪馬堂建て、祈れり。

女身は言へ骨格違しく男子に劣らぬ風格ありけり。

南僧坊母の遺言思ひ出し彌勒出生の大願を立つ。

櫻花散る木蔭に座して冥想に耽る南祖は彌勒の世を待つ。

紀の國の熊野に詣で神力を得んため師の坊に許しを乞ひたり。

歳はまだ十三の坊幼若の故もて師の坊旅行許さず。

南僧坊決心固く夜の間、寺門を抜けて紀州に向へり。

扱て紀伊國熊野山は本地彌陀の藥師觀音にして熊野三社言はれ其靈驗いやちこなりと傳へ

らるゝ靈場地であつて、三社の御本体は、瑞の靈(三ツの魂)の神の變名である。南僧坊は一ケ所の御堂に廿一ケ日宛三ケ所に籠もつて斷食をなし、日夜三度づゝ、水垢離を取つて精進潔齋し一心不亂になつて、彌勒の御出世を祈るのであつた。恰度滿願の夜半になつて、南僧坊は不思議の靈夢を蒙つたので、それより諸國を行脚して凡ての神佛に祈らん、熊野神社を後に第一回の諸國巡禮を思ひ立つ事となつた。

南僧坊熊野三社に參詣し三週三ヶ所水垢離を取る。

瑞御魂神の夢告を蒙りて諸國巡禮の旅する南僧坊。

熊野三社彌陀と藥師と觀音は三つの御魂の權現なりけり。

數十年修行を爲せし皇神は男裝坊(南僧坊)に宣らせ玉へり。

神勅に由つて熊野三社を立出でた男裝坊は先づ高野山に登り大願成就を一心不亂に祈願し終つて山麓に來かゝるこ、道傍の岸石に腰を下ろし休んで居た一人の山伏がつかゞと男裝坊の

前に進んで来た。見れば身長六尺餘、柿色の法衣に太刀を帯び金剛杖をついて威勢よく言葉も高らかに、「如何に御坊修行は法師の業に見受けたり。汝男子に扮すれども吾法力を以て観するに全く女人なり。女人禁制の靈山を犯しながら修行なごは以ての外の不埒ならずや。必ずや佛の咎に由つて修行の功空しからん。萬々一修行の功ありませば吾前にて其法力を現すべし」
「言葉を掛けられて男装坊は暫時ぎよつこしたるが、直に心を取り直し満面笑みを湛へながら、「汝吾に向つて女人なれば不埒ごは何事ぞ、衆生濟度の誓願に男女の區別あるべきや。吾に修行の功如何ごは愚なり。三界の大導師釋迦牟尼如來でさへも阿羅々仙人に仕へて其の本懐を遂げ玉ひしに聞く。況んや凡俗の拙僧未だ修行中にて大悟徹底の域に達せず。御身に於ては又修行の功ありや」
「謙遜しつゝも反問した時、彼の山伏は鼻高々ご答ふやう、「拙者はそもく大峰葛城の小角、吉野にては金剛藏王、熊野權現は三所その他山々溪々にて極めし法力に依つて空飛ぶ鳥も祈り落し、死したる者も生かす事自由なり。いざ汝ご法力を行ひ較べん」

「ご詰めよるにぞ、男装坊は靜かに答へ「さらば貴殿の法力を見せ給へ」「然らば御目に掛けん、驚くな」
「山伏は腰に下げたる法螺の貝を取つて何やら呪文を唱ふるご見えしが、忽ち炎々たる火焰を貝の尻から吹き出してその火光の四方に輝く様は實に見事であつた。男装坊は泰然自若として暫時打ち眺め居たるが、やがてニッコミ微笑みながら靜に九字を切つて合掌するや忽ち猛烈なりし火焰は跡なく消え失せて了つた。山伏は最初の術の破れたるを悔やしが、何を小癪な今度こそは思ひ知らせんご許り、傍の小高き所へ駆け上りざま、珠數も碎けよご押しもんで一心不亂に祈れば見るく、一天俄に掻き曇りビューく、凄い風は彼方の山頂より吹き下りて一團の黒雲瞬く間に擴がり雪さへ交へて物さみしい冬の景色ご變つて了つた。其の時に異様の怪物遠近より現れ出で笑ふもの叫ぶもの、聲天地に鳴り轟きさも恐ろしき光景を現出した然れごも男装坊は少しも騒ぐ色なく、「扱てもく見事なる御手の内」ご賞めそやしなごら眞言即言靈の神器を用ゆれば、今までの物凄き光景は忽ち消滅して再び元の晴天にかへつた。

山伏は之を見て、「恐れ入つたる御手の内、愚僧等の及ぶ所に非ず。御縁も在らば又お目に懸らん」云々男装坊の法力に征伏された山伏は、叮嚀に會釋を交して何處にもなく立去つて了つた。

(262)

斯くて男装坊は高野の山を下り紀州尾由村にいふ所に差し掛り嘉茂云へる有徳の人の許に一夜の宿を求めた。所が其の夜主人が男装坊の居室を訪ねて言ふやう、「實は私の妻が四年斗り前から不思議の病氣に犯され、遠近の行者を頼みて祈禱するも一向少しの効目も無く誠に困り果てゝゐる次第なれば何卒御坊の御法力を以て御祈念給はり度し」云々言葉を盡して頼み込む様子に男装坊は「してその御病氣は」云々問へば「ハイ實は夜なく髪の中から鳥の頭が無數に出ては啼き叫び、その鳥の口へ飯を押し込めば忽ち頭髪の中へ隠れるといふ奇病です。何ぞ云つても毎夜くゝのこゝで妻は非常に寒れ果て明日をも知れない有様、何卒御見届けの上御救ひ下され度し」云々涙をはらゝゝ流して頼むのであつた。男装坊は暫時小首を傾け考へて居た

が「はて奇態なる事を承はるものかな。何は兎もあれ拙僧及ばず乍ら其の正体を見届けし上祈念を爲さん」云々快よく承諾した言葉に主人は欣喜雀躍するのであつた。扱てその夜丑満三思頃になるに案の如く病人の頭から數十羽の鳥の頭が出て啼き叫ぶ様は實に氣味の悪い程である。男装坊は病人の苦しむ様子を熟視した上、「扱てもく不憫の者なるかな」云々座敷の中央に壇を飾つて病人を北向きに直し、高盛の食十三盛、五色の幣三十三本を切り立て清水を盥に汲んで、「足」云々いふ文字を書いた一寸四方の紙片を水に浮べ、さて衣の袖を縫んで肩に打ちかけ珠数をさらゝゝ押しもんで暫く祈るに見えしが不思議なるかな今まで七轉八倒の苦しみに呻吟して居た病人は忽ち元氣付き頭の鳥は一羽も残らず消え失せて了つた。「最早大丈夫明晩からは何事も無かるべし」云々言へば主人を始め並居る一統の人々は非常に喜んで禮を述べ勸めらるゝまゝに一兩日足を停むるこゝはなつた。

果してその翌晩からは何事もなくなつたので男装坊は止むる家人に、「急ぎの旅なれば」云々

(263)

別れを告ぐるや主人は「名残惜しき事ながら最早是非もなし、些少ながら」にて數々の進物を贈らうとしたが、「拙僧は身に深き願望あつて、諸國を廻るもの一切施し物は受け難し。去り乍ら折角の御厚志を無にするも何んこやら、又一つには病人より離れた鳥さもは此のまゝにして置いてはさぞや迷ひ居るならんも心許なし、今一つの願ひあり、是より東に當つて一里斗りの所にある竹林の中へ一つの御堂を建立し、額に鳥林寺と銘を打ち給はらば幸なり」と言ひ残してから家人に再び別れを告げて道を急いだ。それより男装坊は二名の鳴へ渡り數々の奇瑞を現はし九州に渡つて筑紫の國を普く廻り所々にて病人を救ひ或は御堂を建立する事數知れず再び本土に歸り熊野に詣で三七日間の祈願を籠め第二回目の諸國行脚に出た。

男装坊熊野を後に紀伊の國高野の山に詣で、ぞ行く。

高野山下れば籠の道の傍に山伏ありていさみ懸れり。

男装坊山伏僧の妖術を殘らず破れば山伏謝罪す。

高野山あに尾由の村に入り嘉茂のやかたに露の宿りす。

嘉茂の妻奇病を救ひ寺を建て急ぎ二名の鳴に渡れり。

二名鳴筑紫の鳴を經巡りて奇蹟現はし衆生を救へり。

男装坊再び熊野に引き返し三七日の荒行を爲す。

男装坊爰より二度目の國々の行脚の旅に立ち出でにけり。

男装坊は彌勒出世大願の爲に國々里々津々浦々遺る限なく修行しつゝ十三才の頃より七十六歳に至るまで前後を通じて殆んど六十四年間休みなく歩き續けたがこの間熊野三社に額きし事三十二回に及んだ。そして恰度三十三回目の熊野詣での時三七日社前に通夜した満願の夜思はずころ／＼に社前に微睡した。こ思ふこ夢も現つこも判らず神素盞鳴神威容嚴然たる三柱の神を従へ現はれ給ひ神々しいその中の一柱神が「如何に男装坊、汝母に孝信して彌勒の出世を願ふ事不便なり。汝は此の草鞋を穿き此の杖の向くまゝに山々峰々を凡て巡るべし。此

の草鞋の断れたる所を汝の住家と思ひそこにて彌勒三會の神人が出世を待つべし」言ひ残し
神姿は忽ち掻き消す如くに隠れ給ふた。男裝坊は夢より醒めて自分の枕頭を見れば鐵で造れる
草鞋と荆の杖が一本置かれてあつた。男裝坊は蘇生歡喜の涙にむせび乍ら、「ア、有難し有難
し我が大願も成就せり」ミ百度千度社前に額きて感謝を爲し、さらば熊野大神の神命に従ひ
國々の山々峰々を跋渉せん」ミ熊野三社を始め日本全國の高山秀嶽殆んど足跡を印せざる所無
きまでに到つたのである。

男裝坊前後六十四年間休まず日本全土を巡りぬ。

熊野社に三十三回參詣し鐵の草鞋と杖を貰へり。

男裝坊彌勒出世の大願の成就したりと嬉し涙す。

瑞御靈三柱神ミ現はれて男裝坊の先途を示さる。

それより男裝坊は日本全洲の靈山靈地ミ名のつく箇所は残らず巡錫し名山巨刹に足を止めて
道法禮節を説き、各地の雲見水弟の草庵を訪ひて法を教へ且つ研究し、時々病に悩めるを救
ひ不善者に改過遷善の道を授けて功德を積み累ね乍ら北方の天を望んで行脚の旅を十幾年間續
けたる爲、鬚髯に霜を交ゆる年配となり、幾十年振りにて故郷の永福寺に歸つて見れば、悲し
きかも恩師も兩親も既に已に他界せし後にて、只徒らに墓石に秋風が咽んでゐるのみであつた
男裝坊は今更の如くに諸行無常を感じ己が不孝を鳴謝し、懇に菩提を弔ひ又もや熊野大
神の御誓言もあるところより何時迄も故郷に脚を停むる譯にもゆかなかつた。

日の本のあらゆる靈山靈場に巡錫なして道を説きつゝ。

雲水の徒等に法の道傳へくゝて諸國に行脚す。

いたづきに悩める數多の人々を救ひつ巡りし男裝坊かな。

數十年行脚終りてふる里に歸れば恩師も父母も坐まさず。

師の坊やたらちねの墓にしく／＼と詣て見れば咽ぶ秋風。

世の中の諸行無常を今更に感じて師父の菩提巾らふ。

三熊野の神の誓ひを果さむと男裝坊は故郷を立つ。

降奥の國人たちより大蛇が棲めり怖れられ人の子一人近寄りしここの無き赤倉山、言分山八甲田山なごへ登つて悪魔を言向和さむと、又もやその年の晩秋風吹き荒ぶ山野を行脚の旅に立ち出づるこゝと、した。

降り降りしく紅葉の雨を菅の小笠に受け、積る山路の落葉を鐵の草鞋に掻き分け悲しげに鳴く鹿の聲を遠近の山の尾の上や溪間に聴きつゝ西へ／＼と道もなき嶮山を岩根木根踏みさくみつゝ深山に別け入り、或る夜この岩窟内に一夜の露の宿りせんものこ岩間を漏れくる燈火を便りに荊棘をはつ／＼分けて辿りつき見ればコハそも如何に怪しきも怪しき花に啞つて妙齡の美人が現れて、男裝坊の訪ひくるこゝを豫期してゐたかの様に満面に笑みを湛えて座に

請じ入れた。

「あな嬉しや懐しや、御坊はその名を男裝坊とは申さざるや。妾は過ぐる年觀相術に妙を得たる行者の言に由りて、妾が前生にて愛くし愛しまれたる背の君たりし人は現代にも再生し男裝坊と名のり、諸國行脚の末今年の今宵この山中に來たらるべきを聴き知り、幾歳の前より此の附近の山中に入りて貴坊に再會すべき今日の佳き日を指折り數へひたすらに待ち申す者なり。願はくは妾の願ひを容れて今生にて妹背の契りを結び、我身の背の君と成らせ給へ」と言ふにぞ、男裝坊は大に驚き「我身は三熊野の大神の御靈示に由つて末に主なるべき靈地を探査して難行苦業の旅を續くるもの故、如何に御身の願ひなればとて、一身の安逸を貪る爲に大神への誓ひを破る譯にはゆかね。自分は實際女身の男裝者である」と、懇々説示して心底より諦めさせようとする努力はしたが、戀の闇路に迷つた女性に到底素直に聴き入るべき氣配もなく、首を左右に振り涙をはら／＼と流し乍ら「御坊よ譬へ女身なりとて出家なりとて同じく人間と

生れ給ひし上は血潮の体内に流れざる理由なし。よしやよし三熊野の大神への誓ひはあるこは
言へ左様なる味氣なき「枯木倚三寒巖三冬無暖氣」的な生涯を送られては人間として現世に
生れたる樂みは何れに有りや。妾が庵は斯の如き見るもいふせき岩屋なれど、前生にありし妹
背の深き契りを今生に蘇へらせて最も愛しき君を爲すならば、たゞへ木枯すさふ晩秋の
空も雪降り積もる深山の奥の隠れ家も我家のみは春風胎蕩して吹き來たり、暖氣室内に充ち
滿ちて憂き世の移り變りも他所に我が家のみは永久に春なるべきに。この憐むべき女性の至誠
が木石ならぬ肉身を持つ御坊の胸には透徹せざるか。愛しの御坊よ、その神への誓ひをやらを
放擲して妾の主人になり此の岩屋に永久に留まり給へ」衣の袖にまつはり付く様は殆んど佛
弟子阿難尊者に戀せし旃陀羅女の思ひも斯やまばかり嬌態を造り春怨綿々として泣き口説くの
である。

男裝坊には夢にも知らぬ今の意外の出來事に當惑し、最初の間は手を拱いて默然たりしが、

我が膝に泣き崩れ荒波立たせて悲しみなげく女性のしほらしき艶容を見ては、人性を持ちて生
れ出でたる男裝坊、たゞへ自分は女體とは謂へ默殺することは出來ない。殊に愛の神仁の佛の
化身なる男裝坊は人を憐む情の人一倍深い身にまつては如何にも之をすることが出來ない。過
去數十年間の己が修行を破る惡魔として氣強く五臟の奥の間に押込めて置いた愛の戒律の一念
が朝日にあたる露の如くに解け初めて、遂には女性の情にほだされ大神への誓ひを破らんとし
た一刹那、忽ち腦裏に電光の如くに閃めき渡つたのは今日迄片時も忘れられなかつた三熊野大
神が御靈示の時の光景の莊嚴さであつた。そこで男裝坊は此處にこの佛夜の明くるを待たば森
羅萬象を焼き盡さねば止まぬ底の女性の熱情にほだされ永年の望み、固くなりし信念も溶かさ
れて遂には大神への誓ひを破り大罪を重ねることになつて了ふ。女性には氣の毒ではあるが一
つ心を鬼にし蛇を爲して逃げ出すより他に途も方法もなし固く握り占めてゐる美女の手から
法衣の袖を振り離し、泣き叫びつゝ跡追つかけ來たる可憐な女性の聲を後に一目散に深き闇の

山中へ生命からく逃げ込んで了ひやつこ一息をついたのであつた。それより又もや幾日幾夜を重ねて上へく登り詰め、ある山の頂に登りて見れば意外にもかゝる深山の中にあるべしとも思はれぬ宏大なる湖水が目の前に展開してゐた。男装坊は驚き且つ喜び湖面や四圍の山並の美しい風光に見惚れてゐるこ、不思議なるかな足に穿ちたる鐵の草鞋の緒がふつゝりこ切れた次に手に持った錫杖が忽ち三段に折れて見るく木の葉の如く天に飛び上がり大湖の水面に落ちて了つた。男装坊は思ふやう、扱は幾十年の間夢寐にも忘れざりし吾が成佛の地、永住の棲家は此處のこゝであつたか。かゝる風光明媚なる大湖が吾か棲家は實に有難や辱けなや天を拜し地を拜し八百萬の神々を拜跪し、それよりすぐさま湖畔に降りて之を一周し吾が意に満てる休屋附近の濱邊に地を相し、笈をおろして旅装を解き幾十年未だ嘗て味はなかつたころの暢々とした気分になり安堵の胸を撫でおろすのであつた。

大蛇すむ八甲田山その外の深山高峰探る男装坊かな。

雨にそぼち寒風に吹かれて男装坊は修行のために又行脚なす。

くろかねの草鞋うがちて山川を跋涉修行の男装坊かな。

深山の岩間の蔭の灯影見て訪へば不思議や美女一人棲める。

男装坊山の美人に戀されて神慮を恐れ夜暗に逃げ出す。

熱烈な美人の戀を跳ぬつけて又山に逃げたり男装坊師は。

高山の尾の上に立ちて十和田湖の水鏡見て驚きし男装坊。

十和田湖の畔に鐵の草鞋はぶつこきれ錫杖三段に折れて散りゆく。

三段に折れし錫杖十和田湖の水面さして落ち沈みたり。

十和田湖は永久の棲家こ男装坊思ひて心安らかなりぬ。

それより男装坊は湖畔に立てる巨巖今籠森の上に登りて七日七夜の間不眠不食して座禪の行を修し一心不亂に天地神明に祈願を凝らし終るや湖水に入定して十和田湖の主なるべく決心

し、龜占場の湖邊に到り岸邊の巖上に佇立して又もや神明に祈願した。時恰も十五夜の望月圓々皎々たる明月は東天に昇りて湖上に月影を浮べ大空一片の雲もなく微風さへ起らず水面は凍りつきたる如く靜寂であつた。男裝坊は仰いで天空に浮ゆる月を眺め、俯しては湖上の月を眺め天地自然の美に見惚れ居るこゝ稍暫し、やがて入定の時刻も近づいて來た。瞑目合掌して最後の祈願を捧げ今や湖水に入定せんとする時、今迄靜寂にして鏡の如く澄み切りし湖面俄に荒浪立ち起り圓満具足の月輪の影千々に碎けて四邊に銀蛇金蛇の亂れ泳ぐかと思はるゝ折もあれ不思議なるかもその波紋は次第々々に大きくなり遂には中の湖の邊より鼎の涌く如くに洶涌し其中より猛然奮然として躍り出でたるはこの湖の主として久しき以前より湖中に棲んで居た八郎の化身の龍神である。頭上には巨大なる二本の角を生じ口は耳まで裂け、白刃の牙をむき出し眼は鏡の如く爛々輝き幾十丈も計り知られぬ長鬚の中央をば大なる龍卷の天に冲したる如く湖上に起し、男裝坊をハツタミ腕み付け「ヤヨ男裝坊克く聞け、この湖には八郎

こ云ふ先住の主守りあるを知らぬか、我身の位置を奪はんこ狙ふ不屈者汝身命の安全を顧はば一刻も早く此の場を退却せよ」天地も震動する大音聲をあげて叱咤し牙をかみ鳴らし爪をむき出し、只一呑みこみ押し寄せ來る。男裝坊は吾は戦を好むものにあらず、三熊野大神の御啓示に由つて今日より吾は此の湖の主なるべし。神意に逆はず穩かに吾に讓渡し勇ぎよく此の地を去れ、こ説き勸むれ怒りに燃えたる八郎の龍神如何で耳を籍すべき、十和田湖の主八郎の猛勇無比、精悍無双なるを知らざるか、この瘦せ坊主奴氣の毒なれども我が牙を以て汝が頭を噛み碎き、此の鋭き爪にて汝の五体を引き裂かん。覺悟せよこ奴鳴りながら飛びかかる。男裝坊も今は是非なく法術を以て之に對し、互に秘術の限りを盡し戦へども相互の力譲らず不眠不休にて相戦ふこ七日七夜に及び何時勝負の果つべくも思はれぬ狀況であつた。

男裝坊月の清さに憧憬して湖面にしばし佇み合掌す。

大神の靈示の棲所は此の湖に入定せんため湖に入らんこす。

此の湖の主なる八之太郎蛇は浪荒立て、怒り出したる。

男装坊は吾が永住の秘家なり早く去れよと八蛇に迫る。

八之太郎龍神怒り角立て、男装坊に噛み付き迫る。

男装坊ひるまずあらゆる法術を盡して大蛇と挑み戦ふ。

天震ひ地は動きつゝ七日七夜龍虎の争ひ果つる時なし

爰に於て男装坊は止むを得ず天上に坐す天の川原の棚機姫の靈力を乞ひ幾百千發の流星彈を貰ひ受け之を爆彈となして敵に投げ付け、或は雷神を味方に引き入れ天地も破るゝ斗りの雷鳴を起さしめ大風を吹かせ豪雨を降らせ、幾千万本の稻妻を槍となしたる獅子奮迅の勢にて挑み戦へば、八郎ももても叶はじみや思ひけむ、暫しの間手に印を結び呪文を唱へ居たりしが、忽ち湖中に沈み再び湖底から浮び出たるその姿は恐ろしくも一軀にして八頭十六腕の蛇体と變り、八頭の口を八方に開き水晶の如く光る牙を噛み鳴らし白刃の如く研ぎ磨いた十六本の腕の

爪をば十六方に伸ばし風車の如く振り廻しつゝ敵對奮戦するためにも其の力相伯仲して譲らず、再び七日七夜不眠不休の活躍、何時勝負の決すべしとも豫算がつかぬ状況である。

男装坊思ふに我が爲に此の如く永く天地を騒がし奉るは天地神明に對して誠に恐懼に堪へぬ今こなつては止むを得ず神佛の力に頼るより他に方法なしと笈の中より神書一卷、神文一卷を取り出し之を恭しく頭上に高く掲げて神旗となし朝風に靡かせ八郎の大蛇に打ち向へば、嗚呼不可思議なるかな神書神文の一字一字は残らず弓箭たりて抜け出し、激風に飛ぶ雨や霰の如く八郎に向つて飛びゆき眼耳鼻耳に云はず全身五体寸隙の残るころなく刺つて深傷を負はせた。

八郎は勇氣と膽力にかけては天下無双の剛者なれども惜しいことには無學なりしたため神書神文の前に立つては男装坊に對抗して辯疏すべき方法を知らず、信仰力を欠いでゐたので流石に剛勇を以て永年間此附近の神々や鬼仙等を畏服せしめ居たりし八郎の龍神も、此の重傷に弱

り果て今は再び男装坊に向つて抵抗する氣力もなく、腹を空に現はして湖上に長軀を横たへ苦しげに呻吟する斗りこなつた。その時全身幾万の瘡口より鮮血雨の如くに流れて湖水に注ぎ忽ちのうちに血の海たらしめたのであつた。爰に八郎は男装坊に破れ千秋の怨みをのんで十和田湖を逃げ出し小國ヶ岳、來滿山を経て更に川下に落ちのび、三戸郡下に入つてこの邊一帯の盆地を沼みなし十和田湖に劣らぬ己が棲家を造らむせしが、この地方は男装坊の生立ちし爲め男装坊にまつて縁故の深き土地なるがため、此の附近の神々は一同協定結合して八郎を極力排斥することとなり、四方より巨石を投じて攻撃されたるため、八郎は居た、まらずして又もやこゝを逃げ去り、山々を越えて鹿角郡に入り郡下一圓を大湖に化し、十和田湖よりも大きな湖水を造り徐ろに男装坊に對し復讐の時機を待たむ企てしも、附近の神々や鬼仙等は十和田湖に於ける男装坊に八郎の戦ひを觀望して男装坊の神の法力、遙に八郎の怪力を凌ぐに餘ることを知つてゐるため、今は八郎の威令も前の如くには行はれず此の附近の守護神なる毛馬内の

月山神社、荒澤八幡宮、萬屋地藏その他數千の神社の神々は、大湯に集まりこれに古川錦木の織姫まで参加の結果、大會議を開き男装坊の味方となり、八郎を排撃すること、決し、月山の頂上に登りて大石を瓦礫として投げ付けたため、八郎は居た、まらず十二所扇田の流れを下りて寒風山の蔭に一湖を造り、此處に永住の地を見出したが八郎の名に因んで後世の人之を呼んで八郎湖と稱ふるに至れり。

かくて男装坊は三熊野三神別けて神素齋鳴尊の神示によりて彌勒の出現を待ちつゝありしが、天運茲に循環して昭和三年の秋、四山の紅葉今や錦を織らむとする頃神素齋鳴尊の神示によりて爰に瑞の魂十和田湖畔に來り、彌勒出現の神示を宣りしより男装坊は欣喜雀躍、風雨雷鳴地震を一度に起してその徴証を示しつゝ、その英靈は天に昇りたり。それより再び現界人の腹を藉りて生れ男性となりて彌勒神政の神業に奉仕すること、はなりぬ。

吁神界の經綸の深遠にして宏大なる到底人心小智の窺知し得る限りにあらず。畏しこも畏し

次第にこそ。

神習靈幸倍坐世

附言、男装坊現世に再生し、彌勒の神業を繼承して常磐に堅磐に神代を樹立するの經緯や出生の經緯に就いてはこそ神祕に屬し、未だ發表を許されざるものあるを遺憾とするものであります。(完)

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

定價金壹圓拾錢(送料共)

著作者 加藤明子編

京都府龜岡町大字荒塚一

印刷兼 瓜生 鏝 吉

京都府龜岡町大字荒塚一

印刷兼 第二 天聲 社

發行所 振替大阪七五九一七番

不許
複製

出口王仁三郎聖師口述

各卷 定價 金壹圓

(送料共)

靈界物語

- ▲靈主体從 全十二卷
- ▲如意寶珠 全十二卷
- ▲海洋萬里 全十二卷
- ▲舍身活躍 全十二卷
- ▲眞善美愛 全十二卷
- ▲山河草木 全十二卷

大本神が出口聖師を通じて苦集滅道を説き道法禮節を開示せるものである。彌勒の神、下生して三千世界の大革新を成就せんが爲に人類の最高の指針として齎したる神典である。人事百般の問題に對し神明の解決を與へたるもの、蓋し萬人必讀を要する教書である。

全百二十卷の中既刊七十二卷

出口聖師著

庚午日記

定價 壹圓
大和綴美本
四六版三百頁

第一卷から二十卷まで

出口聖師日常の行蔵はすべて本書にをさめてある。大本神業の經緯と之が進展の當事者たる出口聖師の一言一行は誰人も知らんと欲する所であらう。聖師は本書を以てその起居動作と共に、最近の思想を詩歌に托し、また論説として發表して居られる。今日に於ける靈界物語とも云ふべき讀み物である。

京都府龜岡町
第二天堂社
振替大七五九一七

京都府綾部町
第一天堂社
振替大〇五三四

大本への手引書

大本の大意を最も簡單明瞭に紹介したのが本書である。先づ起源を述べ神柱たる開祖と聖師の靈縁から今日迄の神業進展、十年事件、蒙古入、靈界物語の真相を明かにし、次いで惟神の教、神の眞愛を詳説し大本の中心たる出口聖師の超人的な片鱗を示してある。尙最後の光明たる大本が他の教と如何なる特異點を有するかを掲げ正しい研究の方法をも附け加へてある。宣傳用として蓋し最も好適である。

最新刊

大本の話

定價一部二十錢

四六版百二十頁

寫眞十數葉入

振替大版六〇五三四
振替大版七五九一七

天聲社

京都府綾部町
京都府龜岡町

加藤明子編

鏡水

如我
是問

四六版三〇〇頁

定價壹圓拾錢(送料共)

本書は月鏡の姉妹篇でありまして、大正十四年八月號より昭和三年十月號迄の「神の國」誌上に毎月發表されたものを全部収録したものであります。月鏡と共に、出口聖師の大愛と叡智の片鱗を示した金字塔であります。御一讀をお勧めいたします。

發行所

京都府龜岡町天恩郷

第二天天聲社

振替大版七五九一七番

◇ 大本宣傳機關 ◇

月刊
神の國

月刊
瑞祥新聞

毎月十五日發行

定價一部貳拾錢(送料共)

半年壹圓貳拾錢一ヶ年貳圓四拾錢

地上を神國化せんとする大本運動

の宣傳雜誌、まさに暗黒の世の光

明である。

毎月一日發行

定價一部參錢(送料共)

一ヶ年參拾錢

神の意思と神の教との福音は専ら

本紙の報道する所、大本宣傳の先

驅をなすものである。

終

